

# ドイツ啓蒙主義歴史学研究（I－5）

## —Johann Christoph Gattererの 世界史叙述における古代ギリシア史—

岡 崎 勝 世

### 目 次

#### 一. はじめに

#### 二. ガッターラーの古代ギリシア史叙述

(1) 『普遍史序説』(1771)と古代ギリシア史

(2) 『世界史試論』(1792)と古代ギリシア史

#### 三. ガッターラーの古代ギリシア史叙述の位置

(1) 「普遍史」における古代ギリシア史の位置

(2) ドイツ初期ロマン派の古代ギリシア史論

(3) 古代ギリシア史研究の歴史とガッターラーの位置

#### 四. 小 括

### 一. はじめに

今日われわれは、「古代ギリシア」という語を聞いたとき、「古典文化」あるいは「古典古代」といった語をただちに思い起こす。そこで思い浮かべているのは、もちろんヨーロッパ文化の支柱の一つが古代ギリシア・ローマの文化だということである。もう少し詳しく言えば、この「古典文化」はまず古代ギリシア人とローマ人によって形成・展開され、ルネサンスを通じて「再生」し、モラリストの思想や「古典主義」芸術などによってヨーロッパに定着していく。そしてやがてヨーロッパ人が近代市民社会を建設する過程で、それは「古典」＝規範としての役割を果たし、さらに今日なお、ヨーロッパの文化を支え続けていると、そこでは考えられている。こうした考えは、現代のわれわれにとっては、一般的「常識」となっている。しかもこの「常識」はわれわれがつくりだしたものではなく、ほかならぬヨーロッパ人自身から受け取ったものである。そしてまた、それは今日の

ヨーロッパ人自身の考えでもある。<sup>1)</sup>

だが実際のところ、ヨーロッパ人自身はいつからこのように考え始めたのであろうか。「常識」的には、それはルネサンス時代以後ということになる。しかし、そうとも言えない事実がある。というのは、筆者が一連の論考で扱ってきた「普遍史」においては、<sup>2)</sup> 古代ギリシア史に決してこうした位置づけは与えられていないからである。しかもこの「普遍史」は、古代ローマの時代にキリスト教の教父たちから始まり、中世を通じ、さらにルネサンス時代を生き延び、一部では18世紀末まで書き続けられた伝統的世界史叙述だったのである。

本稿のテーマは、ガッターラーの古代ギリシア史叙述が有している意義を考察することである。彼が18世紀後半に行った古代ギリシア史叙述は、今日の観点から見れば、当然ながら様々な欠陥がある。だが本稿が目指しているのは、彼の叙述を今日的観点から評価することではない。むしろ18世紀までの伝統的ギリシア観や、18世紀という時代との関係のなかで、彼の議論が有していた意味を考察することである。これまでの論考で筆者なりに明らかにしてきたように、18世紀と19世紀の歴史家たちの間には、取り組んだ問題においても、また同一の対象をめぐる研究においても、数多くの点で顕著な相違があった。本稿は、そうした一例としてガッターラーの古代ギリシア史研究を取り上げ、具体的内容の特徴と、その意味について考察しようとするものである。そしてこの作業の結果は、上で述べ

た今日の「常識」自体が持つ歴史的な性格をいわば背面から照射することにもなるであろう。

## 二. ガッテラーの古代ギリシア史叙述

ガッテラーが四種の世界史叙述を残したこと、ただし大きく言えば、『普遍史教科書』(1860)と『普遍史序説』(1771)という二著作が一つのまとまりをなし、他方『世界史』(1785)によって彼の世界史叙述の内容が大きく転換し、次の『世界史試論』(1792)でもさらにその転換が進められていること、以上については何度も触れてきた。<sup>3)</sup>

ガッテラーの古代ギリシア史叙述についても、またこのことが言える。すなわち、厳密に言えば彼は生涯に四種類の異なったギリシア史叙述を残している。とはいえ、やはりそれらも、前期と後期との二期に区分することができるのである。そこで本稿では、まず、彼のギリシア史叙述の意義の考察を行う前提として、前期を代表させて『普遍史序説』におけるギリシア史叙述を、また後期を代表させて『世界史試論』のそれを、見ておくことにしたい。

### (1) 『普遍史序説』(1771)と古代ギリシア史

ガッテラーの前期の最も基本的な特徴を挙げるとすれば、それは聖書に対する絶対的とも言える信頼である。聖書の記述をその言葉通りに信ずる「逐語的靈感」の立場に立ち、その上で、あらゆる場面で聖書の記述を合理的に説明しようとしている。そこで筆者はこの態度を「追隨的合理化」という言葉で表現することにしている。<sup>4)</sup>そして歴史叙述の根本にあるのも、この立場である。すなわち前期ガッテラーは、その世界史叙述の基礎に聖書を置くと同時に、また歴史記述によって聖書の真理を合理的に説明しようとしていた。それは伝統的な「普遍史」の

枠内で、新たな世界史の理論構築の努力を行っていたことを意味する。ギリシア史叙述もその一環であった。それではその内容はどのようなものであったろうか。

『普遍史序説』における古代ギリシア史叙述は、全体として「ペルシア的諸民族体系」の中に位置づけられている。<sup>5)</sup>この「諸民族体系」自体は、全体の構想の中で次のように位置づけられている。すなわち歴史上最初の世界支配者アッシリア人を頂点として、まず「アッシリア的諸民族体系」が出現する。次いでこれにかわって「ペルシア的諸民族体系」が成立し、さらに「マケドニア的諸民族体系」が成立する。ここまでは、世界は単一の「諸民族体系」として現れる。しかし、アジアで「パルティア的諸民族体系」、ヨーロッパで「ローマ的諸民族体系」が成立して以後は、アジアとヨーロッパ各々に「諸民族体系」が形成され、それらが並存する時代となって現代に至るとされている。このなかで古代ギリシア史は、ペルシア人を頂点として世界が一つの「諸民族体系」を形成していた時代の、一構成要素として位置づけられているわけである。

ガッテラーはかかる世界史の構成のなかで古代ギリシア史を叙述するわけであるが、その内容は大きく三部分から成っている。まず第1はギリシア人の起源に関する記述、第2はギリシア史の概説、第3は個別国家史の記述である。

第1のギリシア人の起源については、もちろん基本的には聖書によって説明される。すなわちギリシア人は全て(マケドニア人を含めて)「ヤワンの子孫」(314)である。<sup>6)</sup>また、他のギリシア史にかかわる諸民族も、彼を祖として形成される。「創世記」第10章には、ヤベテの子ヤワンにはエリシャ、タルシシ、キッテム、ドダニムの4名の息子がいたとある。ガッテラーによれば、このエリシャは「ヘレネス」の祖へ



レンおよびエリスの祖先、タルシシはギリシア人の、キッテムはペロポネソスのペラスゴイとゲティ、さらにはゴート族の祖先、ドダニムはテッサリアのペラスゴイとエピルスのドーナ人の祖であった。そしてアジアで形成されたこれらの諸民族は、ノアの他の子孫たちと別れて小アジア、ヘレスポントスを越え、ヨーロッパへと渡ってきたのである。

このようにまずギリシア人全体の出自が聖書によって説明されるのだが、後のギリシア人については、このペラスゴイとヘレネスの混血だけでなく、さらにカドモスに代表されるフェニキア人、ケクロプスやダナオスに代表されるエジプト人、そしてブリュギア人の子孫たちも、民族形成に参加したと説明されている。

第2の古代ギリシア史概説では、マケドニアのフィリップ2世の即位を世界史的な画期とし、王の即位までの古代ギリシア史を、以下のように三期に時代区分している。使用されている年号は、ペタヴィウスの年代学に基づく創世紀元のものである（以下では、比較のため、筆者の計算によるBCの年号をつけ加えていくことにする）。

- (1) ペラスゴイ時代（またはペラスゴイ単独時代）；2127年～2409年(1857～1575BC.)
- (2) ヘレネス時代(またはヘレネス、ペラスゴイ並存時代)；2409年～2779年(1575～1205BC.)
- (3) ヘーラクレイダイ時代；2779年～3624年(1205～360BC.)

まず「ペラスゴイ時代」について見ておこう。ペラスゴイは、古いギリシア人の伝承に現れる。アルカディア地方には、ゼウスとニオペーの息子で、大地から生まれた最初の人間でもあった王ペラスゴスとその子孫に関する伝説があった。またアルゴスや北方のテッサリアなどでも、別にペラスゴスや彼を祖とする人々にまつわる他

の物語が伝えられている。ホメロスやヘカタイオスなどにも彼らは登場しており、<sup>7)</sup> こうして、ギリシア人自身、ペラスゴイを彼らの先住民族と考えていたことが様々なかたちで伝えられている。とはいえ今日、彼らは専門書には未解決の「ペラスゴイ問題」として登場するものの、一般の歴史書にこの民族名が登場することは、まずない。<sup>8)</sup> しかし、ガッテラーは、ギリシア人の伝承通りに、ギリシア史の冒頭に、ペラスゴイの時代を置いているのである。従って、この時代はまだギリシア人（＝ヘレネス）が登場する以前の時代である。その出発点となっているのが2127(1857BC.)年で、イーナコスによるペロポネソス最初のペラスゴイ国家、アルゴス王国の建国の年とされる。伝統的にはギリシア最古の王国とされてきたのは、やはりペラスゴイの一人であるアイギアレウスを初代国王とするシキュオン王国であった。ガッテラーはその王家について「極めて古い」と認めながらも、「しかしその系譜も王の数も不確実である。」(343)としてこれを退け、アルゴスを確実な最古の王国としているのである。<sup>9)</sup> また2228(1756BC.)年、オーギュグスによってアテネ王国が建国されたが、やがて2401(1583BC.)年にエジプトから移住してきたケクロプスがこの王家を受け継ぐと述べ、アテネ王国もこの時代に成立したとしている。

ここでギリシア史の始点を2127年、アルゴスの建国者イーナコスに置くことが、彼のこの時点での世界史叙述においてどのような意味を有していたかを考えておきたい。彼は『普遍史序説』において、ノアの大洪水はインダスとガンジスにより北西インドで起こって全世界を覆ったと考え、その年号を1656(2328BC.)としていた。そして箱舟がたどりついたアララット山は、パロパミス山脈にあると考え、従って人類史再出発の地は「バクトリアと北西インドの

地方」<sup>10)</sup>と述べていた。彼らはやがてバビロニアに達し、バベルの塔の建設後、世界の各地に拡散することになる。それは1809(2175BC.)年、ペレグの時であった。その後ヤワンの子孫であるキッテムを祖とするペロポネソスのペラスゴイがまずギリシア半島に到達し、建国したのである。バベルの塔の事件後ここまで318年間が経過した計算になる。また本書ではヤコブの生没年が2107(1877BC.)年, 2254(1730BC.)年とされているから,<sup>11)</sup> イーナコスはアブラハムの孫ヤコブの同時代人ということにもなる。イーナコスとヤコブを置いたのである。つまり古代ギリシア史は、こうして、ヘブライ語聖書の描く人類史の枠内に、すなわちプロテスタント的普遍史の枠内に収められることになったのである。

次に第2の「ヘレネス時代」の内容を見よう。この時代は全体としてヘレネスとペラスゴイが共存した時代である。とはいえ、それは決して平和的なものではなかった。というのは、この時代はまず2409(1575BC.)年、プロメテウスの息子でヘレンの父となるデウカリオンのフォキス侵入で幕を開けるからである。有名なデウカリオンの洪水が起こったのは2479(1505BC.)年だとも述べている。この間、彼の子孫たちは次第に支配地を拡大していく。ヘレネスの呼称のもととなったヘレンがプティオーティスの王となったのは、2462(1522BC.)年である。さらに彼の息子アイオロス、ドーロス、クストスたちをそれぞれ祖とするアイオリス人、ドーリア人、イオニア人、アカイア人たちが、ギリシア

半島から小アジアにまで拡大していく。<sup>12)</sup> 他方ペラスゴイは、アルカディアなどの小地域に生き残ったほかは、ヘレネスと混血したり、イタリアその他に逃れていった。またこの時代にはフェニキア人カドモスがテーバイを建設し(2464, 1520BC.), ダナオスがエジプトからアルゴスに亡命した(2509, 1475BC.)。そして、この時代の末期近くでは、ギリシア人の海外遠征も行われるようになった。イアーソーンを指導者とするアルゴナウテースの遠征(2721, 1263BC.), それにトロイ戦争(2790~2800, 1194~1184BC.)である。

古代ギリシア史の第3期は「ヘーラクレイダイの時代」である。この時代については3つの期間が設定されている。最初はヘーラクレイダイの帰還の時代である(2779~2881, 1205~1103BC.)。この結果ペロポネソスは、アルカディアを除き、大きな変化をこうむることとなった。すなわちアルゴス、メッセネ、ラケダイモン、コリントはいずれもヘーラクレースの子孫が王位につき、そしてエリスでは「三つ目の男」オクシュロスが王位に就いた。<sup>13)</sup> コリントの王となったアレーテースがアテネを攻めたとき、アテネ王コドロスが一身を犠牲にしてアテネを守ったこと、コドロスの死後、息子のメドンが王政を廃止し、アルコン政に移行したことも、伝承のとおりに叙述されている。第2の時代は民主政体(Demokratie)」(341)の段階に発展した時代である。テーベ(2865, 1128BC.), ミュケーネ(3000, 984BC.), 続いてリュクルゴスによってスパルタが(3100, 8848BC.), そして任期10年のアルコン政によってアテネが(3200, 784BC.)この段階に到達したとするのである。第3の時代は戦乱の時代である。3次にわたるメッセニア戦争、ペルシア戦争(3479~3535, 505~449BC.), ペロポネソス戦争(3553~3580, 431~404BC.), そしてスパルタとテーベの2度の戦争である。



だがこの最後の戦争が終わった3年後の3624(3608BC.)年、マケドニアにフリッパ2世が現れて、「ペルシアの諸民族体系」下における古代ギリシアの歴史にピリオドを打つことになる。

第3部にあたる個別国家史には、実は最も大きく頁がさかれている。本書では古代ギリシア史の叙述は全体で163頁であるが、そのうち第1部ギリシア人起源論の14頁、第2部概観の16頁に対し、この第3部は133頁も占めているのである。その内容は、イーナコスが建国したアルゴス王国の歴史から始まり、アルカディア、シキュオン、アカイア、コリント、ラケダイモン(スパルタ)、エリス、アッティカ(アテネ)、テーベなどの王国、さらにテッサリア地方の小王国や、国家を形成しなかった諸族に至るまでの網羅的叙述となっている。<sup>14)</sup> 個々の叙述について言えば、それは古代ギリシア人の伝承を集大成したもので、そこでは建国者をはじめそれ以後の歴史についても、神話や伝説が歴史的事実として受け容れられている。従って、その叙述で大きな位置を与えられている国々も、今日のそれとは異なっている。例えば最も頁数が多いのは、ペラスゴイのオーギュロス以後カドモスやオイディプス王をめぐる物語など、膨大な伝説圏を有しているテーベで、8頁、ボイオティア地方全体では28頁にもなる。さらにフォキス、ロクリス、アイトリアなどといった地方に各々4～5頁も当てられているのに、ラケダイモンには1頁、アッティカには2頁と、平均的な頁数しか与えられていないのである。

このようにスパルタやアテネに特別な位置を認めていないことは、今日のわれわれには奇異な感じを与える。だがこの点についての考察は後に行うこととして、ここでは、スパルタとアテネについての記述を簡単に見ておきたい。それは、ガッテラーの時代の古代ギリシア史叙述の雰囲気を知ることができるからである。まず

スパルタについては、アルゴス王ポローネウスの息子(または兄弟)スパルトスが2226(1758BC.)年にスパルタを建設し、レックスが初代国王となった。その息子ミュレースの後、2496(1488BC.)年、エウロータスとラケダイモンの共同統治が行われ、前者からエウロータス川、後者からラケダイモン人の呼称が成立したこと、さらにテュンダレーオス王と王妃レーダーの間に、カストールとクリュタイムネーストラ、ポルクスとヘレネーの2組の双子が生まれ、カストールとポルクスはアルゴナウテース遠征に参加し、他方、クリュタイムネーストラとヘレネーはそれぞれアガメムノン、メネラーオスと結婚するが、この結婚がやがてトロイ戦争に発展していくことなどが語られる。このテュンダレーオス家は2881(1103BC.)年にヘーラクレイダイの侵攻で滅び、かわって双子のエウリュステネースとプロクレーが王位に就き、これがその後のスパルタ2王家の祖となったこと、やがて3110(884BC.)年、リュクルゴスが改革を行い、スパルタの国制を固めたことなどが語られている。

アテネ史の叙述もまた、今日われわれの親んでいるそれとは大きく異なっている。ガッテラーは、アテネの歴史を王政時代とアルコン政時代との二つの段階に、時代を区分している。まずアッティカ最初の王は、テーバイの王でもあったペラスゴイのオーギュロスであった(2228, 1765BC.)。その後、2401(1583BC.)年、アクタイオス王のときエジプトのサイスからアッティカにケクロプスが亡命し、王の娘婿となって王位を継承するとともに、アテネを建設した。2495(1489BC.)年以後は王位はエリクトニオス家に移るが、この王家で最も有名なのは2754(1230BC.)年にアテネの国制を定めたテーセウスである。その後ヘーラクレイダイの侵入を受けたピュロスからメラントスが亡命してくるが、彼は、2856(1128BC.)年、テーセウスの後裔テュモイ

テースが後継者を残さず死んだ結果王に選ばれ、王位はメラントス家に移った。メラントスの子コドロスは、ドーリア人の侵攻を受けたとき一身を投げうってアテネを救った。<sup>15)</sup> こうして2913 (1071BC.)年、その子メドーンがあとを継ぐことになったが、彼は誰も父のような王になり得ないとして、一生をアルコンとして過ごした。すなわちメドーンによって、アテネでは王政が廃止されることになったのである。

アテネはこうしてアルコン政の段階に入るわけであるが、この段階をガッテラーはさらに次の3期に分けている。

1. 終身任期アルコン期：2913(1071BC.)~3227(757BC.): 上記メドーンから最後のアルクマイオンまで全員がコドロスの子孫であった。
2. 10年任期アルコン期:3227~3297(687BC.): 7名のうち最初の4名のみがコドロスの子孫。
3. 1年任期アルコン期：3297~：クレオン以後。

最後の段階については、次のように説明されている。「クレオンの統治によってアテネに民主政体が始動された。民主政体はまずドラコン(3361, 623BC.)の、次いでソロン(3390, 594BC.)の諸法によってさらに展開されていくが、ただペイシストラトス家の僭主政治(3424~3473, 560~511BC.)と3年間の30人僭主政治の期間だけは一時的に中断された。」(S. 358)<sup>16)</sup> 説明文はこれのみである。つまり今日では絶対に落とすことは有り得ないクレイステネス、ペリクレスの名前は出てこないのである。また、1年任期のアルコン政成立をもって「民主政体」とすることも、今日からは問題がある。もっともこの点では、プルタルコスがテーセウスの樹立した

国制を「民主政」としているから、これをそのまま受け容れたとも考えられる。<sup>17)</sup> いずれにしろ、ガッテラーの描くアテネ史では、その大部分がアッティカ(アテネ)をめぐる伝説が占めていることになり、今日では大きな位置を占めるポリス成立以後の歴史は、そのほんの一部分しか占めていないのである。<sup>18)</sup>

最後に、ガッテラーの『普遍史序説』に書かれていないことについても触れておかなければならない。すなわち、本書には今日最も重視して叙述される「ポリス」の成立や身分闘争、「古代民主政」などに関する叙述は見られないし、またなによりも、「ギリシア古典文化」について、何ら記述されていないのである。

## (2) 『世界史試論』(1792)と古代ギリシア史

ガッテラーの『世界史試論』<sup>19)</sup>は、彼の晩年の、そして最後の世界史叙述となったものである。先の『普遍史序論』を刊行した後、ガッテラーには大きな転機がおとづれた。その結果が1785年に刊行した『世界史』であるが、『世界史試論』はその転換を継承し、発展させたという性格を有している。『世界史』以後を彼の「後期」とする所以である。<sup>20)</sup> 前期と後期とを分かち最も大きな相違は、聖書に対する態度の違いである。すなわち後期では聖書の記述に対する「追従的合理化」の姿勢が改められ、聖書は人間が書いた、批判的に読むべき書物とされているのである。ただしその上で、聖書に記されている真理を擁護し、それを合理的に説明しようと目指されてもいるので、筆者はこの新たな態度を「批判的合理化」の立場と特徴づけておいた。<sup>21)</sup> 後期に書いた二著作でいずれも「世界史(Weltgeschichte)」というタイトルを採用し、「普遍史(Universalhistorie)」という前期のそれを捨てているのも、この根本的態度の変化と無関係ではないと筆者は考えている。そして当



然ながらその中で、世界史の一要素である古代ギリシア史も、前期のそれとは大きく変化した。そこで以下では、『世界史試論』を素材として、古代ギリシア史叙述の変化した点を中心に、その内容と特徴を見ていくことにしたい。

まず第1に、古代ギリシア史を叙述する前提である世界史の構成そのものが変化し、またそのことと結びついて、『普遍史序説』にはなかった文化史記述が大きな位置を占めることになった。<sup>22)</sup> まず彼は人類史の第2期を「アッシリア・ペルシア期」とし、さらにその期間を「アッシリア期」と「ペルシア期」に時代区分した。そこでマケドニア人登場以前の古代ギリシア史も、これに従って大きく2つの時期に区分されて叙述される。ただし注意すべきことは、前期の『普遍史序説』における「アッシリアの諸民族体系」、「ペルシアの諸民族体系」が政治史的観点から設定された区分であるのに対して、今回の「アッシリア期」と「ペルシア期」とは、政治史的な意味を残しながらも、むしろ文化史的視点から設定されていることである。たとえば「アッシリア期」を見てみよう。そこでは全体が、「諸民族の歴史」、「人類の歴史」の2節に分けられている。そして「諸民族の歴史」の節では、アジアのアッシリア人、バビロニア人、メディア人、イスラエル人など、アフリカではエジプト人など、そしてヨーロッパではギリシア人やイタリア（ローマ）人の、この期間の歴史が概観される。「人類の歴史」のところでは産業と分業、技芸、科学、商業と海運、家族制度、社会制度、宗教の7項目が立てられ、各項目の中では、諸民族のいかなる人々がその歴史的段階における人類の文化に貢献したかを列挙していく。そしてそこでは、どの民族にも特殊な、あるいは中心的な位置は与えられていないのである。すなわち、あくまで人類の文化的発展の一段階として「アッシリア期」が設定され、古代ギリ

シアもその一要素として記述されているのである。<sup>23)</sup> 次の段階である「ペルシア期」も全く同じ構成をもっており、「アッシリア期」について述べたことがそのままあてはまる。そして全体としては、このうち「人類の歴史」と題された文化史記述が叙述の中心となっている。前節では、『普遍史序説』には文化史的叙述が見られないと指摘しておいた。これに対し本書では文化史記述が中心となり、その一環として、古代ギリシア人の文化的活動について詳細な記述が展開されているのである。

第2の変更は、聖書に対する態度の変化を反映して、神話・伝説に対し、これを批判的に扱う態度が顕著になっていることである。まず全体として聖書に基づく記述は極力押さえられている。人類史の第1期は「アダム＝ノア期」とされているが、これを「伝説的歴史」(S.3)とし、しかも全861頁のうち2頁しかあてていない。そして、この態度は古代ギリシア史研究にも波及している。すなわち、まず、彼はノアの大洪水をインド北西部で起こった局地的なものと考えようになり、そこから大洪水による人類の8名への減少を否定し、大洪水を免れた民族も多かったことを承認した。このことは聖書の「民族表」が地球上の全人類の出自を記したものであるのではないとの考え方に発展し、その結果、前期ではあれほど大きな努力を払っていたギリシア人の出自を聖書によって説明する作業も、本書では一切放棄されている。さらに古代ギリシア史の時代区分に「伝説の時代」という概念が導入され、『普遍史序説』では無批判に事実として扱われていたギリシア神話や伝説に対し、「伝説」という枠がはめられているのである。

第3に、上の結果、アレクサンドロス以前のギリシア史についても、下のように異なった時代区分を行うようになっている。そして以下の時代区分のなかでは、今日のポリス時代にあた

る「共和政及び民族的統一性形成の時代」の記述が、従来以上に詳細に展開されるようになっていく。

#### 一、アッシリア期(1809～3431、2175～553BC.)

##### (1) 伝説の時代(2127～2800、1857～1184BC.)

1. ペラスゴイ時代(2127～2426、1857～1558 BC.)

2. ペラスゴイ・ヘレネス共存時代(2426～2800、1558～1184BC.)

##### (2) 歴史時代(2800～3425、1558～559BC.)

1. ヘーラクレイダイ侵入の時代(2799～3000頃、1185～984頃BC.)

2. 共和政及び民族的統一性形成の時代(3000頃～3431、984頃～553BC.)

#### 二、ペルシア期(3431～3600、553～384BC.)

古代ギリシア史の開始は、やはり前期同様にアルゴス王国の成立におかれている。<sup>24)</sup>「伝説の時代」と「歴史時代」を分けている2800(1184 BC.)は、トロイ戦争終結の年である。また「ペルシア期」は、開始がキュロスの即位に置かれている。終期は3600年と数値が丸められているが、ギリシア史に関しては、3646(338BC.)年のカイロネイアの戦いと翌年のコリント同盟の成立までを記述しているから、アレクサンドロス以前、フィリップ2世までをこの時代に入れていることになる。

記述の内容を簡単に見ておこう。まず、「伝説の時代」、および「歴史時代」のうち「ヘーラクレイダイの侵入」までは、前期の『普遍史序説』とほとんど異なるところはない。しかし叙述自体は変わらないにしても、位置づけが「伝説」に転化したことは先にも述べた通りである。さらに、「歴史時代」の第2節、「共和政及び民族的統一性形成の時代」以後になると、その叙述には大きな変化がみられる。本節は「共和政体の導

入」、「アテネとスパルタ」、「聖なる競技による民族的統一の形成」の三項目からなっている。まず、「共和政(Republikanische Regierung)の導入」の項目からみよう。前期では、この時代は「民主政体」の導入期と述べていた。それに対して本書では、3000(984BC.)年頃、「従来の王政にかわり、エピルスとマケドニアを除いて、どこでも共和政が導入されていった。」(S. 31)と言う。そしてテーベ、アルゴス、ミュケーネ、シキュオン、スパルタ(リュクルゴス)、コリントなどを挙げている。アテネについては10年任期アルコン政導入(3230、754BC.)によって共和政に移行するとし、「3298(686BC.)年の1年任期アルコン政の導入により寡頭政に移行し、次いで3390(594BC.)年のソロンの立法以後、民主政が行われた。民主政はペイシストラトスによって一時中断された。」(同)としている。ガッテラーには、「貴族政の成立=ポリスの成立」といった今日的な考え方はみられない。だが今日と同様に、王政から貴族政への移行を、古代ギリシア史の画期としているわけである。

『普遍史序説』では、テーベなど多彩な伝説に彩られた国々の歴史に膨大な頁がさかれていた。だが本書では、「最も有名なギリシアの共和国」(S. 32)として、アテネとスパルタのみが記述の対象となり、その内容も格段に詳しくなっている。スパルタはまた「リュクルゴス的国家」(同)とも言われ、3100(884BC.)年に行われたとするその立法については、「王族の一員でディドーの同時代人だったリュクルゴスは、ミノス下のクレタ人の手本にほぼ従ってスパルタの国制を改革した。その主要な目的は、少数者の多数者に対する支配を通じ、軍事的に、ただし非侵略的に祖国を防衛することであり、この意図を達成するための手段として行われたのが少年少女の軍国主義的教育、市民の平等であった。」(同)という。そして王家、エフォーロス、長老会、民



会からなる国制や、それが500年以上続くこと、またそれには、3次にわたるメッセニア戦争によって、メッセニア人をヘイロータイに落としめたことが結びついていることなどが説明されている。

アテネは、また「ソロンの国家」(S. 33)とも呼ばれ、コドロス以後終身任期アルコン政、10年任期アルコン政を経て、3298(686BC.)年、貴族による1年任期アルコン政へと移行した。アルコンは「紀年アルコン」、バシレウス、ポレマルコス、6名のテスモテタイの計9名からなる機関である。ガッテラーは、アテネの共和政は、ドラコンの立法(3360, 624BC.)とこれに続くソロンの改革(3390, 594BC.)で、民主政として完成したと考えている。ソロンの改革の目的は「民衆には最高権力を与えるが、貴族には国家の行政権を与えることであった。」(同)また、ソロンによる市民の4等級制導入も、この目的のためであったと位置づけられている。さらにアテネ人の社会は市民、外国人、奴隷という3身分からなっていることも、丁寧に説明されている。ソロンの国制に関して評議会、民会、アレイオス＝パゴスの会議などについて細かく説明した後、「ソロンの国制は、3234～3474年のペイシストラトス家の独裁でも破壊されず、健全な形で賤民統治の時代まで続いた。この賤民統治(Pöbel=Regierung)は、3525(459BC.)年、ペリクレスとエフィアルテスという人物を通じて、はじめて実現したものであった。」(S. 34)とする。ガッテラーのエフィアルテス、ペリクレスに関するこの言及は、彼の政治姿勢を考える上でも重要である。<sup>25)</sup>

最後に、第4に、先に述べておいた文化史記述重視への転換という点について見ておきたい。先に、『普遍史序説』では政治史のみが叙述され、文化史記述がなかったことに触れておいた。それに対し本書の特徴の一つは、文化史のほう

が全体として主要な位置を占めていることである。<sup>26)</sup> その記述は、上でも述べたように、ギリシア人に特別の地位を与えたものではない。このことを例えば「アッシリア期」の文化の叙述のうち、「科学」の項目(74～87頁)例に取って見ておこう。この項目は、さらに哲学、天文学、年代学、数学、幾何学にわけて記述されており、その「哲学」のところでは、1)最初の自然哲学者としてモーセ、ティルスの人サンコニアトンなどについてまず述べられ、その後ホメロス、ヘシオドス、タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスがとりあげられている。ついで、2)立法者としてモーセや、グネパクトス、アシュキス、ボッコリスという3名のエジプトのファラオたち、クレタ島のミノス2世に続き、最後にテーセウス、リュクルゴス、ドラコン、ソロンなどがあげられている。3)モラリストの記述では、テュロスのヒラムなどに続いてギリシアの七賢人、アイソポスなどが記述され、最後に4)ギリシア語で記述したスキュティア人哲学者としてアナカルシス、トクサリスなどが挙げられている。いま「哲学」を例としたが、上で挙げた7項目の全てにわたり、その記述はこれと全く同様に展開されている。すなわち全てにわたってまず文化的段階が重視され、その段階に貢献した各民族に対しては、同等の地位が与えられているのである。

次に「ペルシア期」について、ギリシア人に関する叙述を中心に拾ってみよう。<sup>27)</sup> この時期は今日から言えば「古代民主政」が完成を見る時代であり、また「古典文化」が頂点を迎えている時代にあたる。ガッテラーもこの時代、ギリシア人が「技芸と科学の黄金時代」(S. 139f.)を迎えたと述べている。そして、とりわけペリクレスが指導した3542(442BC.)年から3562(422BC.)年までの20年間が、その頂点だったことも指摘している。<sup>28)</sup> 「人類の歴史」の節で述べら

れる7項目のうち、ここでは「技芸」の一部と「科学」のうちの哲学だけをみてることにしよう。まず、「技芸」は中世以来の概念であることに注意したい。すなわちこの項目で扱われるのは、冶金や貨幣鑄造などの技術だけではない。弁論術や文学、歴史も扱われる。弁論術に関してはソフィストに始まり、プラトンを経てイソクラテス、デモステネス、アイスキネスへの発展が述べられる。文学については次のように述べている。「最も偉大な文学者たちが活動したのはセルクセスからアレクサンドロスに至る期間であり、その大部分はアテネ人である。まず最初に三大悲劇詩人、すなわちアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデス、次いで9名の抒情詩人中最高位を占めるピンダロスおよび彼とは同郷の女流詩人コリンナ、最後に古喜劇作家達のうち最も有名なアリストファネスらがそれである。とはいえ、最初の最も偉大な理論家のアリストテレスはアレクサンドロス時代の人である。」(S.150)最後に歴史学について述べられ、ヘシオドス、ヘロドトス、ツキュディデス、クセノフォン、クテシアスが紹介されている。また「科学」の項目のうち「哲学」をみると、孔子やゾロアスターなどについての記述と並んで、ピュタゴラスとその学派、クセノファネス、パルメニデスなどのエレア派、ヘラクレイトス、アナクサゴラス、デモクリトスらの孤立的思想家、ソフィストたち、そしてソクラテスとその後継者たち、プラトンとアカデメイア派の哲学者たちがなどが網羅的に挙げられていく。このような形で上の7つの全項目が叙述されていくのであるが、その結果本書は、古代ギリシア文化の内容一般に、すなわち思想、宗教から社会、政治、さらに生活一般までに関し、網羅的・百科事典的記述を与えているのである。

### 三. ガッテラーの古代ギリシア史叙述の位置

前章では、ガッテラーが残した古代ギリシア史叙述の内容について、それが前期の著作と後期の著作との間でどのように変化したかをみた。またそれぞれの時期の記述内容を多少細部にまで立ち入ってまとめたが、それは、その記述自体や、また記述における重点の置き場所などについても、今日の古代ギリシア史叙述との間に存する大きな相違を実感するためであった。

本章では上で見た彼の記述が有していた意味を考察するが、それを以下の三つの側面から行うことにしたい。まず最初に行うのは、西欧の伝統的世界史叙述だった「普遍史」において、ギリシア史がどのような位置を占めていたかをみ、それと『普遍史序説』におけるその位置と比較することである。伝統的「普遍史」と、ガッテラーのそれとの関係を考えるためである。次にドイツ初期ロマン派の古代ギリシア像を問題にするが、それは『世界史試論』におけるそれと比較し、その限界を確かめるためである。最後に西欧におけるルネサンス以後のギリシア史研究をスケッチし、そのなかでのガッテラーの位置を見ていく。そしてこれら三つの側面からの位置づけを総合して、ガッテラーの古代ギリシア史叙述の歴史的意義を考察することにした。

#### (1) 「普遍史」における古代ギリシア史の位置

「普遍史」が、古代ローマ時代にキリスト教の教父たちによって開始されたこと、なかでも西欧に最も大きな影響を与えたのはエウセビオス＝ヒエロニムスの年代学であったことなどについては、度々論じてきた。<sup>29)</sup> 従って本稿ではその全体像などについては触れないで、ギリシ



ア史がそこでどのように語られ、どのような位置を占めていたかなど、本稿のテーマに係わる側面を中心に見ていくことにしたい。本稿で取り上げるのは、古代では、エウセビオスも参照しながら、主としてアウグスティヌスの『神の国』、中世ではオットー・フォン・フライジングの『年代記』、および18世紀に人気の高かったヒューブナーのギムナジウム教科書『政治史問答』である。

まずアウグスティヌスの場合をみよう。『神の国』<sup>30)</sup>で、周知のように彼は人類の歴史を神による人類教育の過程とし、具体的には「地上の国」と「天上の国」の対立・抗争の過程として描いた。そしてこの救済史観の立場から、天地創造からノアの洪水までを第1期とし神の国が実現した段階の第8期までの時代区分を与えた。このうち人類の現実の歴史過程となるのは、彼自身が生きた第6期までである。<sup>31)</sup> もちろんその具体的過程についても、彼は詳細に語っている（アウグスティヌスの「普遍史」についてはその概要を表-1にまとめておいたので参照されたい<sup>32)</sup>）。

彼の「普遍史」はこのように壮大な理論的構想に基づくものであった点で、「年代学の父」アフリカヌスや、「教会史の父」エウセビオスとは大きく異なっている。だがこの点を抜きにしてその実際の記述を検討してみるとどうなるだろうか。実は表に示されている内容は、ほとんどエウセビオスの『年代記』の引き写しとも言えるほどのものなのである。<sup>33)</sup> もちろん相違もある。例えばノアの洪水について、アウグスティヌスは「わたしたちの写本にしたがえば、アダムから洪水まで二千二百六十二年」(15-20)としている。これに対しエウセビオスはそれを2242年としていたのである。両者はともに70人訳聖書に基づいて計算しているのであるが、しかし、その「写本」に相違があったと考えられる。

そのほか固有名詞や王位の順序などに関しても、相違がみられる。エジプト史に対しても、アウグスティヌスはその古さを否定し、関心も払っていない。だがこうした小さな相違を除けば、まず、年代の枠組はほとんど変わらない。というより、アブラハム以後の年代計算については、これをエウセビオスに従っていると言える。見かけの上では、例えばアブラハムの誕生年がアウグスティヌスでは3334年、<sup>34)</sup> エウセビオスでは3184年と大きく異なっている。しかしこれを筆者なりに「イエス前」に換算してみると前2017年となり、エウセビオスと全く同一の数値となる。<sup>35)</sup> さらにヘブライ人の歴史を軸にし、これに対立する最も巨大な帝国としてアッシリアとローマを描き、両帝国の有する時間的・空間的な枠のなかでギリシア史を叙述するという構造も、その記述の細部に至るまでほとんどかわるところがないのである。

さて、それでは古代ギリシア史はどのように描かれているであろうか。アウグスティヌスは、エウセビオスやマルクス・ワルロに従って、ギリシア史の始点をシキュオンのアイギアレウスに置いている。もともとシキュオンはローマ人やギリシア人の中では最も古い国とされていた。そこでアウグスティヌスも、アブラハム誕生時に、アッシリアでもシキュオンでも、それぞれ第2代の国王ニヌスとエウロプスが統治していたと述べ、かつシキュオンはアッシリアに比べれば「取るに足りないもの」(同)と指摘しつつ、古代ギリシア史の叙述を開始するわけである。その後ヤコブが誕生する頃、イーナコスによってアルゴス王国が開始される。またモーセに率いられてイスラエルの民がエジプトを脱出する頃、ケクロプスによってアテネが王国として出発する。ここから後のこれらの王国に関する叙述は、人類史の第4期が開始されるダビデの頃までは、比較的詳しく叙述されている。

各王国の王名が伝説に従って挙げられ、またオーギュスやデウカリオンの洪水、プロメテウスやヘーラクレースの活動、トロイ戦争などが歴史的事実として描かれている。彼はローマ建国とアッシリアの滅亡という大事件が同時期におこり、これによって「地上の国」の代表者が交替するとしているが、この時期以後になると、ギリシア史に関してはペルシアが登場する頃までにタレスを始めとするギリシア七賢人の活動が始まったこと、またピュタゴラスらの哲学者が登場してくることなどを記している。だが、例えばペルシア戦争以後のテネの発展や、ましてその古代民主政治などについてなどは、全く触れられていない。そしてやがてマケドニアにアレクサンドロスが現れて大帝国を築く時代に入るのである（以後は省略する）。

アウグスティヌスの古代ギリシア史叙述の概要は以上の通りである。その概要が示していることは、彼の古代ギリシア史に対する関心が、今日のわれわれとは大きく異なっていたということである。すなわち、今日ではせいぜい神話などの一部として紹介はされても、まずは歴史書に書き記されることなどない伝説の時代に、彼の主要な関心が注がれているのである。彼のこの関心のあり方の原因を考えるためには、彼の「普遍史」叙述全体との関係で、古代ギリシア史叙述の位置をとらえ直して見る必要がある。筆者は、この問題に関しては、以下の3点に注目することが必要だと考えている。

まず第1点は、古代ギリシア史の歴史について、これを聖書による人類史記述＝「普遍史」の時間的枠内の、しかも比較的新しいものとして、位置づけていることである。アウグスティヌスはアッシリア史とギリシア史が開始される以前に、既に人類が3000年を越える歴史を経過していると示している。他方ギリシア人はアブラハムの頃にようやく出発点を与えられている。

ギリシア人がその神話を通じて伝えている諸事件が、ヘーラクレースのような半神的英雄や神々たちを含めて、すべてアブラハム以後の事件として位置づけられている。逆に言えば、かかる古い歴史を伝えているヘブライ人の、その古さが示されている。アウグスティヌスは、また、機会あるごとにヘブライ人の歴史の古さを強調している。例えばタレス以後のギリシアの哲学者たちを彼が列挙するのは、それによってギリシア哲学を賛美するためではない。そのタレス以前にすでにヘブライ人の間では預言者たちが活動していたことを示し、ヘブライ人が知的活動においても最も古いことを示すためなのである。それを通じて、さらにキリスト教の古さを強調するためなのである。<sup>36)</sup> また、アルゴス王イーナコスの娘イオがエジプトにわたり、後にイシス神として崇められたという伝えを彼が重視しているのも、同じくエジプト人の知恵の古さを否定するためである。「イシスによって文字がつたえられる以前に、どんな知恵がエジプトに存在しえたのであろうか。」(18-37)というわけである。これに対しヘブライ人の言語は、「バベルの塔」の事件によって諸言語が発生する以前にすでに存在した最も古い言語であるだけでなく、またその文字も世界で最も古いものなのである。<sup>37)</sup>

第2点は、アウグスティヌスがキリスト教の神の摂理が古代ギリシア史を貫いていることを主張していることである。そのことを明瞭に示しているのは、彼がアブラハムとはほぼ同時期にアッシリアとギリシアの歴史的出発点を置いているという事実である。このアブラハムの時代は、彼が人類史の第3期が開始されるとする時点に一致している。それは、人類がノアまでの「幼年期」とノア以後の「少年期」を過ぎ、いまや「律法」を通じて神が人類教育を推進し始める「青年時代」にあたっている(16-43, 21-16)。



そしてまた「この世の国が始まったのも、この第三の時代であった。」(16-43) すなわちアブラハムの誕生とギリシア史(及びアッシリア史)の始点との一致を示すことは、それを通じて、キリスト教の神の人類教育の過程にギリシア史、アッシリア史も組み込まれていることを示すためなのである。こうした神の摂理は、彼によれば、もちろんギリシアとアッシリアのみではなく、人類史の全段階を貫いている。12名の預言者の最初に登場するホセアやアモスなどによって預言者の時代が始まるが、この時期がアッシリアの滅亡＝ローマの歴史の開始の時にあたっているのも決して偶然ではない。「これはすなわちアッシリア王国の最初の時期にアブラハムが現れてその子孫においてすべての民が祝福されるという約束を明白に受けとったように、西方のパピロン(ローマ)のはじまるころに、そしてそのパピロンの支配のあいだにあの約束を成就されるキリストが来られることになったのであるが、そのころに、預言者たちの口は開かれた」のである(18-28)。これら預言者たちはいずれもキリストを予告した。そして「ヘロデがユダヤにおいて支配していたが、ローマ人のもとでは国家の体制に変化がおこって皇帝の統治が世界的な平和を確立したとき、あらかじめ告げられた預言に従って、キリストがユダヤのベツレヘムに生まれられたのであった。」(18-46)こうしたイエス降誕＝アウグストゥスによるローマ帝国の開始とともに、人類史がその最後の、そして決定的段階である第6期に移行したのである。

第3点は、アウグスティヌスが古代ギリシア史に独自の位置を与えていないということである。彼は「他に抜きんでて名声を得た」国としてアッシリアとローマを位置づけた。そして「他の王国や王たちはすべて、これらの王国のいわば付加物といえる」(18-2)と述べている。すなわ

ちシキュオン以下の古代ギリシア史自体には、彼は固有の位置を認めていないのである。こうした背後には「四世界帝国論」という、キリスト教徒独特の理論がからみついている。<sup>38)</sup> ダニエル書第2章と第7、8章で説かれている地上を支配する四つの世界帝国について、アウグスティヌスは次のように述べている。「ある人はこれら四つの王国をアッシリア、ペルシア、マケドニア、ローマのこととして説明したのであった。このような解釈がどのように適切であるかを知りたい人は、きわめて博学にしてしかも精緻に書きあげられた司祭ヒエロニムスによる『ダニエル書注解』を読むべきであろう。」(20-3)アウグスティヌスはこのようにまず最初の世界帝国としてアッシリアを位置づけた。それは、彼の時代区分で言えば、人類史の第3期全てと第4期中頃までの世界における支配者であった。このアッシリアが滅びるとき、同時に、第4の世界帝国となる運命を神に与えられていたローマが出発した。<sup>39)</sup> だが、ローマがその運命を実現するのは人類史の第6期である。そしてアッシリアが滅んでからローマが世界支配者になる中間の期間である第5期における世界帝国として、彼はペルシアとマケドニアを位置づけているわけである。両国は、いわばアッシリアとローマをつなぐ媒介者的役割を与えられていることになる。そしてこの観点からすれば、やはり古代ギリシアには独自の位置が認められず、精々「付加物」としての役割しか与えられないわけである。すなわち古代ギリシアはアッシリア、ペルシア、マケドニアとローマの「付加物」であり、またその歴史には、精々のところ、マケドニアの「前史」の位置しか与えられないのである。

以上の3点は、結局『神の国』全体のテーマともなっている根本的問題意識につながっていく。すなわち彼は本書で、キリスト教は最も古

い宗教であり、またキリスト教の神の摂理がローマ人やギリシア人をはじめとする全人類を貫いていることを示し、彼らがキリスト教批判をやめキリスト教の神を受け容れるよう説得しようとしたのである。そしてアウグスティヌスの古代ギリシア史叙述は、いわばその「各論」的記述であったといえる。すなわちアウグスティヌスには、まず、当時の地中海世界の重要な構成要素だったギリシア人に対し、キリスト教の神の摂理がギリシア人の歴史全体をも貫いていることを示す必要があったのである。そして、彼の古代ギリシア史叙述ではもっぱら神話・伝説の世界に関心が注がれているのも、このことと関係していると思われる。なぜなら、上のことを具体的に論証するためには、なによりもまず彼らが信じている神々や、また彼らが信じていたギリシア史の古さなどについて、それらがいずれも聖書に基づく、より大規模な人類史の一環にすぎないことを示さなければならないはずだからである。だがまたこの問題意識は、ローマ時代に活動した教父たちのそれとも共通のものであった。例えば、上でものべたように、アウグスティヌスの「普遍史」はエウセビオスのそれとほぼ同一の構造を有し、そのなかで、古代ギリシア史についても実際にはほとんど同じ記述がなされているからである。

次に、中世の「普遍史」では古代ギリシア史はどのように位置づけられているであろうか。これを「聖書のに基づくキリスト教世界史としては最も完成されたもの」<sup>40)</sup>とされるオットー・フォン・フライジングの『年代記』で見ておこう。<sup>41)</sup>ただし結論は簡単である。すなわち彼はアウグスティヌスをほぼそのまま継承しているのである(詳しくは、表-2を参照されたい)。それは本書の原題に「二つの都市の歴史」という言葉があり、これはアウグスティヌスの神の国=イエルサレムと地上の国=バビロンを継承し

たものであることから明白である。また彼自身も、「とりわけアウグスティヌスとオロシウスに従った。」と序文で述べ、歴史叙述の基本構想においてばかりでなく、また古代ギリシア史叙述でもアウグスティヌスを継承したことを告白している。

もちろんオットーに独自の点もある。その第1点は彼が採用した年号の体系である。彼はアッシリア以後の時代をニヌス紀元の年号、さらにローマ建国以後はニヌス紀元とローマ紀元の年号を併用して示すのに対し、イエス生誕以後の時代はキリスト紀元の年号で示すのである。<sup>42)</sup>そしてこれらのいずれをも基礎づけているのが、創世紀元の年号体系である。もっとも、基礎としての創世紀元とニヌス紀元、ローマ建国紀元との間には矛盾がある。その最も大きな原因は、記述内容はアウグスティヌスに従う一方で、イエス生誕年に関してはアフリカヌスの創世紀元5500年説を採用したので、これを5349年に置くアウグスティヌスとの間にある151年間のずれを、うまく調整できなかった結果と思われる。<sup>43)</sup>それはともかく、イエス紀元については、オットーはキリスト教の神の摂理を示す年号として、イエス以後は一貫してこれのみを使用している。「イエス紀元」がキリスト教的意味合いを有しているのは、当然のことではある。ただそのことを確認しておくのは、アウグスティヌスにはキリスト紀元という発想がなかったこと、また、今日われわれが使用するキリスト紀元の年号からは宗教的意味が失われていることを思い起こす意味で、必要だと考えるからである。

オットーが有している独自性の第2点は、彼が古代ローマ帝国滅亡後、彼の時代までについて与えた歴史記述にある。そこでは彼はカール大帝について「主の托身から801年、ローマ建設から1552年、その統治第33年、カールは教皇に



よってパトリキウスの称号を与えられ、アウグストゥス以後第69代の皇帝となった。)(V-31)と述べ、古代ローマ帝国とカールの帝国や神聖ローマ帝国とを、ともに「第4の世界帝国」＝ローマとしてくくっている。これによって「ローマ」は中世まで延長された。そしてその結果、具体的には古代ローマ時代までしか叙述されていなかったアウグスティヌスの「普遍史」を、彼は中世にまで拡張したのである。また彼は、コンスタンティヌス帝というキリスト教徒皇帝登場以後の時代を「二つの国」の対立ではなく、君主と教会とが「一つの混合状態の教会」(VII-序言)を形成している時代として描いた。中世世界を、いわば皇帝と教皇を焦点とする楕円ヨーロッパととらえ、こうした構造的特徴を有する世界が成立・展開し、さらに没落にむかう時代として中世を叙述したといえよう。つまり彼の独自性は、古代史叙述ではなく、中世史叙述において発揮されたのである。

以上の2点は、また、ともにオットーの主要な関心がどこにあったかをも示している。すなわち彼の主要な関心は、彼が生きた中世という時代をキリスト教的見地からどのように位置づけるかということであり、具体的には古代に成立した「普遍史」の理論を拡張し、中世的「普遍史」に変革することであった。したがってここでも、古代ギリシア史は主要な関心の対象とはならなかったといえる。あるいは、アウグスティヌスの継承を行うことで、彼にとっては十分だったといえよう。彼にとって「地上の国」における主要な関心の対象は、アッシリア、ペルシア、ギリシア(マケドニア)と、とりわけローマという4つの世界帝国であった。そしてそのなかで古代ギリシア史は、エジプト史とともに「付属物」(I-6)に過ぎなかったし、あるいはマケドニアの「前史」に過ぎなかったのである。

「普遍史」における古代ギリシア史の位置づけや叙述内容は、それが「普遍史」である限りは変わることがなかったといえよう。そのことを、18世紀ドイツにおいて最も人気のあったギムナジウム教科書の一つだったヒュープナーの『政治史問答』(1702)で見ておこう。本書については別稿で取りあげたから、ここでは必要なかぎりを簡単に見るにとどめたい。<sup>44)</sup> ヒュープナーの本書は大きく5巻に分けられている。各巻は「普遍史」の伝統に従ってまず「神の民の歴史」、次いで地上の国の歴史に移り「アッシリア帝国の歴史」、「ペルシア帝国の歴史」、「ギリシア帝国の歴史」、そして「ローマ帝国の歴史」に分けて叙述している。最後の「ローマ帝国」には古代ローマと神聖ローマ帝国も含まれ、従って、時代はアダムとエヴァから現代にまで及んでいる。「ギリシア帝国の歴史」にあてられている第4巻は、さらに第1章「帝国以前のギリシア人の歴史」、第2章「帝国建設後のギリシア人」の2章に分けられている。古代ギリシア史が語られるのはこの第1章においてであり、第2章はもちろんフィリップ2世からアレクサンドロスによる大帝国の建設、またその死後の諸王国の叙述に当てられている。

古代ギリシア史の叙述をみると、大洪水後間もなくギリシアの地に人間が住み、いくつもの小王国を形成したこと、代表的なものとして「ギリシア最古の王国」シキュオン、「最も有名な共和国で、賢者ソロンの法によって治められていた」アテネ、「ヘラクレスの生地」テーベ、「トロヤを破壊した有名な国王アガメムノンの居住地」ミュケーネ、それにラケダイモン、コリントス、クレタ、マケドニアなど12の国々があげられている。当時はまだギリシアが分裂していた時代であったが、この時代の主要な事件として語られるのはアルゴナウテースの遠征、トロイ戦争、オリンピア祭、ペルシアとの戦争、

そしてペルシアとの戦争後に起こった「内乱」である。アルゴナウテース遠征や、トロイ戦争のところでは、神話が歴史的事実として語られていることも、伝統的内容と変わるところはない。そしてこうした分裂したギリシアがマケドニアのフリップ2世によって統一され、さらにアレクサンドロスの大帝国が建設されたことにより、第3の世界帝国である「ギリシア帝国」の時代が実現することになる。つまりギリシア人が「地上の国」の主人公となる時代を迎えることになるわけである。結局、このようにヒューブナーも、マケドニア以前の古代ギリシア史には独自の位置を与えていないのである。それは第3の世界帝国たる「ギリシア帝国」の「前史」としての位置しか与えられていないのである。

さてガッテラーは、彼の最初の世界史叙述『普遍史教科書』(1860)について、後年、次のように述懐している。「25年前に教科書を書いたとき、私が第1に、また主として努力したことは、ヒューブナーやヒューブナー亜流の人々、またケラリウスが提示しているような考え方の世界史を乗り越える試みを行うということであった。」<sup>45)</sup>ここであげられているヒューブナーとは、まさに上で検討したヒューブナーのことである。当時は彼の作品自身が広く読まれていただけでなく、「ヒューブナー亜流」の人々も、また多く登場していたのである。<sup>46)</sup>そして『世界史教科書』は、かかるヒューブナー流の「普遍史」の克服に取り組んだものでもあったわけである。そして前章で述べたように、その作業をさらに推進し、ガッテラーはその「前期」の最も重要な作品、『普遍史序説』(1771)を刊行したのであった。本節の最後に、このような脈絡の中であらためてガッテラーの『普遍史序説』における古代ギリシア史叙述の位置を考えてみることにしたい。

ガッテラーが『普遍史序説』でマケドニア登場以前の古代ギリシア史について行った叙述の要点は、4点にまとめることが出来る。まず古代ギリシア史全体を「ペルシア的諸民族体系」のなかに位置づけたこと、第2にギリシア人を聖書に記されているノアの子孫につなげて考えていたこと、第3に、全体をペラスゴイ時代、ヘレネス時代、ヘーラクレイダイ時代の三つに時代区分し、そこではシキュオンの古さは否定したが、アルゴスやアテネなどを、いずれもペラスゴイ時代の王国から説き起こしていること、第4に個別国家史の叙述に力をいれたが、ここではアテネやスパルタなどよりも、多くの伝説をもつテーベなどのほうに多数の頁がさかれていることである。だがこのように4点にまとめてみると、ガッテラーの叙述は一体どこで彼自身がいつているような、ヒューブナー的な考え方の克服につながるのだろうか、疑問を抱かざるを得ないであろう。

第1点から吟味してみよう。古代ギリシア史を「ペルシア的諸民族体系」のなかに位置づけて叙述するということは、目新しいものではない。本節でみたように、すでに古代ギリシア史はアウグスティヌスや、またオットー・フォン・フライジングにおいても「付属物」として位置づけられていた。あるいはヒューブナーが最も明白に示したように、それは第3の世界帝国を建設するマケドニアの「前史」でしかなかった。ただし、ガッテラーが全く伝統に従っているのみかと言えば、そうでもない。それは、しかしローマ時代以後について言えることである。というのは、彼はローマ時代以後はアジアとヨーロッパにおのおの別の世界支配的民族が現れ、したがってそれ以後は複数の「諸民族体系」が形成されて、世界史が進行していくとしているからである。この意味ではガッテラーは、ヒューブナーのような伝統的四世界帝国論に固執した



世界史の構成を「乗り越え」ているといえる。またこの四世界帝国論の克服という点と結び付けて考えると、問題の「ペルシア的諸民族体系」も、伝統的な第2の世界帝国としてのペルシアと全く同一の概念ではないとも言える。だが他方、アダムとエヴァから始まる人類史のなかで、ニヌスからサルダナパルスに至るアッシリアを頂点とする「アッシリア的諸民族体系」と、それに続いて「ペルシア的諸民族体系」、「マケドニア的諸民族体系」しかガッターは認めていない。なぜであろうか。また、既に前の著作『普遍史教科書』でその古さを認め、またその歴史も叙述した中国を中心とした地域を、なぜ彼は「諸民族体系」として認めることができなかったのであろうか。<sup>47)</sup>それは「普遍史」の伝統になおガッターが強くとらわれていることの証左であろうと、筆者は考えざるを得ないのである。

第2点は、当時聖書に対する「追隨的合理化」の態度を特徴とするガッターにとって、最も重要な問題の一つであった。だがこれは「普遍史」そのものにとっても基本的な問題であり、その点から言えば、ガッターの議論は伝統的な議論の枠を一步も出していない。

第3点は、ガッターが最も努力した部分のひとつである。彼は古代ギリシアの世界に独自の位置を認めなかったとはいえ、それなりにギリシア人の世界に統一的な叙述を与えようと努力したのである。そして彼は3つの時代にギリシア人の発展を時代区分し、彼らの歴史の全体的見通しを与えようとしている。だがそこで実際に語られている「歴史的事実」は、辛うじてシキョオンの古さを否定している点に彼の『批判』の努力を認めるにしても、しかし伝統的な叙述の枠から一步も出していない。その記述の淵源をヒューブナー、オッターを経てアウグスティヌス、エウセビオスにまでたどることが出来

ることは、本節のこれまでの記述であきらかであろう。そしてこのことは、また第4点についてもあてはまる。

以上のように見てくると、ガッターの古代ギリシア史叙述と伝統的な「普遍史」との距離は、実は彼が主張するほどには遠くはない。というより、『普遍史序説』における古代ギリシア史叙述には、本書全体がそうであったように、伝統的な「普遍史」の枠内での一定の修正という位置しか与えることができないのである。

## (2) ドイツ初期ロマン派のギリシア史論

上ではガッターの「前期」の古代ギリシア像と、伝統的「普遍史」との関係を見た。これに対し、本節のテーマはガッターの「後期」の古代ギリシア史記述と、「ドイツ初期ロマン派」のそれとの相違について考察することである。それはガッターのギリシア史叙述の歴史的位置を考える場合、伝統的「普遍史」との関係だけでなく、当時における新たな潮流との関係を見ることも必要だからである。

「ドイツ初期ロマン派」をここで取り上げるのは、その形成者であり指導者ともなったシュレーゲル兄弟が、ともにまだガッターが活動していたゲッティンゲン大学で学んでおり、いわば弟子筋にあたる人々だったともいえる関係があるからである。兄のヴィルヘルム・シュレーゲル(1767～1845)は1788年にゲッティンゲン大学に入り、後に本稿でも取り上げるハイネ教授の指導を受けた。弟のフリードリヒ・シュレーゲル(1772～1829)も兄を頼って1790年にゲッティンゲン大学に入学し、兄弟は91年まで一緒に学んでいる。ただ、残念なことに、二人とガッターの関係ははっきりしない。当時ガッターは文献学や地理学など、歴史補助学の研究に重点を置いていたから、直接指導を受けるということはなかったかもしれない。少なくとも

フリードリヒにはガッテラーの講義を受講した形跡はない。兄宛の手紙からすると、フリードリヒがガッテラーに接したのは著作を通じてであり、それも卒業後、1795年になってのことになるようである。だが他方、指導を受けたハイネは、ガッテラーの親友であった。またガッテラーのもう一人の親友ミハエリスとも、兄弟は浅からぬ因縁で結ばれている。というのは、学生時代に二人はハイネの娘テレゼを通じてミハエリスの娘カロリーネとも旧知の間柄だったが、やがてそのことが契機となり、1796年、カロリーネはイエナでヴィルヘルムと結婚する。そして「ドイツ初期ロマン派」が成立して以後、彼女は「ロマン派の女王」と呼ばれる存在となっていくのである。ガッテラーとシュレーゲル兄弟との間に直接的関係があったかどうか不明であるが、しかし、ガッテラーの数少ない友人のうちの二人との間には、このように濃密な関係が存在していたのである。

さて、ロマン派のギリシア論の問題に移ろう。ここで取り上げるのは、フリードリヒ・シュレーゲルが23歳のときに書きあげ、25歳の時に上梓した論文『ギリシア文学研究論』(1797)である。<sup>48)</sup> 本論文が発表された1797年は、フリードリヒ自身が雑誌『アテネウム』において「ロマン主義文学」の成立を宣言する前年、ガッテラー70歳の年にあたる。当時フランスは総裁政府下であり、そのなかでナポレオンが次第に台頭しつつある時であった。またドイツではフィヒテ『全知識学の基礎』(1794)、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修行時代』(1796)が出版された直後の時代にもあたっている。

本論文は、直接には、表題の如くギリシア文学を研究する意義について論じたものである。そこでは近代文学と古代文学を全く異なる本質を有するものとしたうえで、古代文学＝ギリシア文学の本質を論じているのだが、その議論に

は、ガッテラーとは際だって異なるギリシア観が示されているのである。彼のギリシア観は、次の一文に集約されていると言えよう。すなわち、「ギリシアの文芸の歴史は文芸の一つの普遍的自然史であり、一つの完全かつ立法的な概念である。」(125)と彼は主張するのである。あるいはもう少し詳しく、「ギリシア文学には芸術の有機的发展の全過程が含まれ、かつ完成されている。そして美の可能性が最も自由かつ完全に表現されることのできた芸術の最高潮時は、また趣味の完成段階をも含んでいる。・・・それは趣味と芸術の一つの永遠の自然史である。」(146)とも述べている。つまりギリシア文芸をフリードリヒは一つの有機的全体としてとらえ、その発生から完成を経て没落するに至る自然史的過程において、近代文学とは全く異なる質を有し、そして一つの完結した世界をなしているものととらえている。しかもその運動のなかで、それは「美の可能性が最も自由かつ完全に表現され」た世界を現出した。従って、ギリシア文学は「一つの美的典型なのである。」(124)ギリシア文学は、かくして、近代文学に対し「完全かつ立法的な概念」として、つまり「典型」=模範としての意義を有すると主張しているのである。さらに彼は、この文芸の運動をギリシア人の歴史全体と係わらせて理解しようとしている。それは、ギリシア芸術の最高潮時が「趣味の完成段階」と一致しているという言葉に示されている。つまり今日の言葉に置き換えるなら、ギリシア人の「共同体」と結合した精神的発展段階と対応させて、ギリシアの文芸の「自然史的過程」を理解しようとしているのである。従って文芸史がその一部である古代ギリシア史全体もまた、近代史とは異なる特質を有する、一つの完結した「自然史」をなすと思倣されていることになる。

「自然史」としてのギリシア文芸の歴史の分



析を、彼はホメーロスから始めている。ホメーロスの叙事詩は、彼によれば「導き手である自然の幸運な産物」(128)によるものであった。それは主として「尊崇の対象が真の神性、すなわち真の人間性」(126)であったという、「幸運」な神話的源流によるものであった。だがそれは「神々が人間的性格を持つことや、神々が英雄と交流することなどを民衆が一般的に信じているような時代にのみ存在する」(129)文学である。しかしこうした素朴な時代から、やがて「ギリシアの教養が独立して成年」(139)の段階に達する。この段階での文学は抒情詩として現れる。というのは、この段階では公的な趣味の発展を担う人々がまだ一部の人々でしかなかったことに対応して、文学も「完全な美を分解して、言わば自分たちの間に配分した、一面的に限定されたもの」(139)、つまり抒情詩としてしか自己を実現できないのである。こうしたギリシア文学が完成期に達するのは、「悲劇」の段階においてであった。彼はアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスの悲劇を論じながら、その最高峰をソフォクレスに見いだす。それは、「幸運にも彼はアテネの公的趣味の最高潮時に遭遇し・・・完成した公的趣味と完全な形式の利点とを同時代と分かちあった。」(139)からである。この結果、彼において「ギリシア文学は、現実

に芸術と趣味との自然的教養の最終極限に、自由な美の至高の頂点に達したのである。」(133)

本論文ではここまで論じて他の問題に転じているが、同時代に書いた別の論文で補充すれば、<sup>49)</sup> 以後の歴史は次のようになるであろう。すなわち、「崇高」(アイスキュロス)から「完成」(ソフォクレス)へと発展してきた悲劇と喜劇は、その後「奢侈」(エウリピデスとアリストファネス)を経て「優雅」(新喜劇、メナンドロス)へと没落する。次第に詩人と共同の趣味との乖離が深まるだけでなく、趣味の共同性その

ものが失われていくのである。そしてついに、ブトレマイオス朝時代の「アレクサンドリア派」抒情詩の段階になると、「公共的人倫と自由が消滅したと同様に、また文学においても、情熱もパトスも完全に消滅してしまう。」そこでは、「学者の趣味と名手の虚栄心が芸術を支配し、芸術が芸術の目的となり、美にかかわって技巧が目的となってしまった。」かくして「美がもはや存在しなくなり」、「芸術は技巧品となり、ついにはバルバロイの中に自己を没する」ことになる。<sup>50)</sup>

「自然史的過程」としてのギリシアの文芸の歴史は、こうしてそのサイクルを完結し、幕を閉じるのである。

ここで語られているのは、見られるように、直接にはギリシア文芸(文学)の歴史である。とはいえ、ギリシア文芸史の記述そのものは、ギリシア史の発展と不可分のものとして語られていた。そして、このように文芸史を通じて浮かび上がるフリードリヒ・シュレーゲルの古代ギリシア像が、第1章でみたガッターの古代ギリシア史叙述と大きく異なっていることに、いやでも気付かざるをえないであろう。そこで本節の最後に、ガッター後期の『世界史試論』における古代ギリシア史叙述と、フリードリヒ・シュレーゲルのそれとの相違を以下の3点について見てみよう。

まず第1に、同じ古代ギリシアという対象を記述しながら、両者の基本的観点には大きな差異が存在することである。ガッターの場合は古代ギリシアについて、これを独自の「世界」とは見えていない。彼が最も重視しているのは「アッシリア期」、「ペルシア期」という、人類の文化史的段階である。そして古代ギリシア史は、おのおの段階の人類の文化のなかで一定の貢献を行ったものとして位置付けられ、叙述されているのである。確かに彼は従来の「普遍史」では等閑に付されていた古代民主政期のアテネにつ

いて記したり、とりわけその時代の思想、宗教、社会、政治から具体的生活に至るまでに関して、詳しく記述した。しかし、各文化的段階全体の中では、それは同時期のバビロニア人、エジプト人や中国人たち等々が行った人類文化への貢献と、並列的にとらえられているのである。これに対してフリードリヒ・シュレーゲルの場合、ギリシア人の世界に、同時代の他の諸民族とも、また近代世界とも異なる本質を有する、一つの有機的世界としての位置が与えられている。そして古代ギリシア人の世界は、その古代的本質の発生から発展・完成、そして没落に至る「自然史的過程」をもつものとして分析され、記述されるのである。すなわち、ガッテラーの文化史記述の基礎には蒙主義的進歩史観が横たわっているのに対し、フリードリヒ・シュレーゲルの基礎には「ロマン主義」に基づく歴史主義的な歴史観があり、それが両者を決定的に分かっているのである。

第2に、古代ギリシア文化に対する評価が両者では大きく異なっている。上でも述べたように、ガッテラーの場合はあくまでギリシア人の文化的活動は、文化的進歩を担う人類全体の活動の一構成要素にすぎない。だがフリードリヒ・シュレーゲルにおいてはそうではない。まず古代文学は、近代文学に対して、まさに「美的典型」=古典として位置づけられている。文学だけではない。彼は当時『共和主義の概念』（1796）という政治パンフレットも書いている。<sup>51)</sup>ここでは「共和主義は必然的に民主政治なのである」として民主主義の実現を主張し、<sup>52)</sup>その立場から、フランス革命におけるサンキュロット主義に対し、これを民主政治実現につながるものと評価していた。そしてそこで手本と考えられているのも、古代の民主政治であった。「人倫的共同体に関しては、近代人の政治文化は古代人のそれに比してまだ幼児の段階にある。」<sup>53)</sup>と

すら言われているからである。すなわち当時のフリードリヒ・シュレーゲルにとっては、ギリシア文化は、まさに「古典文化」だったのである。もっとも、より正確に言えば、ここに見られる絶対化とも言えるほどの古代ギリシアへの高い評価は、近代文学の変革者として自らの文学を「ロマン主義文学」と宣言するようになった段階で、修正を受ける。とはいえ、それは「絶対化」から「相対化」への修正であって、古代ギリシア文学の「古典」としての評価までを変えるものではなかった。<sup>54)</sup>

第3に、叙述の仕方にも、両者の間には大きな質的相違が見られる。すなわちガッテラーのそれが「静的」であるのに対し、フリードリヒ・シュレーゲルのそれは極めて「動的」である。これは根本的には第1で述べたことからくると言えるが、その結果、叙述のスタイルも相違することになった。ガッテラーの場合、ギリシア世界での王政から「共和政」への変化は指摘しても、その変化の原因を追究したり、何らかの動因から説明しようとはしない。また、例えばアテネの「共和政」について、政治組織や社会組織に関する詳しい記述を与えてはいるが、そしてこれ自体は当時新しいことではあったが、しかしそれを全て「ソロンの立法」だけで説明している。さらにもっと肝心な点だが、この「共和政」と当時の哲学や悲劇・喜劇等々の発展との内的関連についても、一切考察されていないのである。これに対してフリードリヒ・シュレーゲルの場合、叙事詩の段階から抒情詩、悲劇と喜劇の段階を経、アレクサンドリア派の抒情詩をもって消滅する運動が叙述されている。しかもそれは動因である「人倫的共同体」、あるいは「公共的人倫と自由」の発展、さらにその発展に対応する「公的趣味」、「教養」の発展と結びつけて分析、叙述されている。そしてこの分析方法は、全体においても、各論においても適



用されている。例えば各論としての悲劇（および喜劇）について見てみよう。喜劇と悲劇は古代民主政の段階に対応させられている。この民主政治の生成、発展、没落に伴って、そこにおける自由と「公的趣味」が変化する。そしてこうした展開に対応して、悲劇自身も発展・完成し、そして没落するのである。彼のこうしたギリシア悲劇に関する叙述と、例えば次の文章とを比較してみよう。「個人と共同体との関係における人間、あるいは共同体として自己を表出せざるをえなかった個人というものの内奥を分析するのが、悲劇詩人の任務となる。個人と共同体との関係は、・・・古典古代的共同体において、従来になかったより高次の矛盾を内包するに至った。このような共同体の枠の中で、個人と社会との対立を通じて個人が主体性を強化しうる客観的可能性は、民主政のもとで最大となる。アテネ民主政の発展がこの可能性を保証した。」これは、太田秀通氏がギリシア悲劇の本質について述べている言葉である。<sup>55)</sup> このギリシア悲劇に関する太田氏の記述とフリードリヒ・シュレーゲルの記述には、時代や用語においては大きな隔たりがある。だがその分析視角や実質的内容において、両者の間の距離は、それほど隔たっていないと筆者には思われる。あるいは少なくとも、フリードリヒ・シュレーゲルとガッテラーの間にはむしろ断絶を認めることができるが、フリードリヒ・シュレーゲルと太田氏、あるいは現在のギリシア研究との間には、明らかに連続性が認められると、筆者は考える。

### (3) 古代ギリシア史研究の歴史とガッテラーの位置

上では、伝統的歴史記述である「普遍史」との係わり合いでガッテラーの『普遍史序説』におけるギリシア史叙述、次いでドイツ初期ロマ

ン主義との係わり合いで彼の『世界史試論』の位置を考察してみた。本節では、ルネサンス期から18世紀までの期間の、ヨーロッパにおける古代ギリシア史研究を概観し、そこにおけるガッテラーの記述の歴史的位置について考えることにしたい。<sup>56)</sup>

さて、ルネサンス期イタリアにおけるギリシア語古典研究の開始について、藤縄謙三氏は次のように言っておられる。「十四世紀のイタリアでは古代ローマの古典や文化一般が復活したのに伴って、この世紀の末葉にはローマ人自身が古典として学んでいた古代ギリシアの古典をも学習する必要があると痛感されるようになった。」<sup>57)</sup> こうした動きのなかで、1396年にはビザンティンの有名なギリシア語学者クリュソロラスがフィレンツェを訪れてギリシア語を教えたり、また、14世紀末にはヘロドトスやツキュディデスなどもラテン語に翻訳され、さらに15世紀にはいるとギリシア語の原典出版や英・独・仏・伊語への翻訳も行われていく。<sup>58)</sup> シチリアのディオドーロスやプルタルコス、クセノフォンらの歴史書もほぼ同時期に翻訳されている。こうして古代ギリシアの歴史書も、古典としての「再生」を遂げている。

こうした動きやルネサンスに関する一般的「常識」から推測して、古代ギリシア史研究が開始されるのはイタリア・ルネサンスからと考えておかしくないように思われる。だが事態はそうに単純に進んだわけではない。それは、樺山紘一氏の表現を借りれば、ギリシアはラテン世界にとっては二重に「異境」であったからである。すなわち、「ラテンに対するギリシアであるとともに、現代に対する古代であり、この二重の障壁がつくりだす距離への認識が、じつは容易でない知的苦勞をもとめる。」<sup>59)</sup> からである。当時のイタリア人は、古代のラテン語著作というスクリーン、それに当時のビザンティ

ン世界というスクリーンに映じた古代ギリシアに接近したが、しかしその接近の仕方そのものもまた、当時のイタリア人文主義者が置かれた時代状況によって、角度が異なっていた。例えば、14世紀にはペトルルカやボッカチオなどの文人がホメロスはじめギリシア語韻文に関心を示し、15世紀冒頭にはフレンツェ人文主義者たちが自己の政治的立場を投影し、アリストテレス、プラトン、プルタルコスなどに関心を向けて古代ギリシアの「公民的」価値を賞揚した。そして1430年代以後は、ビザンティンの状況とも結びついて新プラトン主義がもてはやされた。古典文献学は15世紀半ばには確立していくとはいえ、こうした全体的状況の中では、まだ古代ギリシア史の研究までは関心が向かなかったというのが、当時の状況だったのである。実際、15世紀イタリアでは、「古典」の要約、抜粋といった形でのギリシア史の書籍は散見されるにしても、しかし独自の研究に基づく古代ギリシア史叙述は、「ほとんど存在しない」<sup>60)</sup>と指摘されているのである。そしてこのような「散見される」例自体も、少数のパトロンの嗜好に結びついた、一部の学者の間で見られた動きに過ぎなかったと指摘されているのである。<sup>61)</sup> こうしてイタリア・ルネサンスは、古代ギリシア史の研究に対し、ギリシア語古典の「再生」によってその基礎を与えはしたものの、しかしそれにとどまった。そして古代ギリシア史研究そのものは、イタリアではなく、アルプス以北の国々に委ねられることになった。

とはいえ、アルプス以北でも古代ギリシア史研究は順調に展開を遂げたわけではなかった。というのは、続く16世紀、17世紀は宗教改革や宗教戦争が続いた時代だったからである。まず16世紀について言えば、宗教改革そのものは、アルプス以北でのギリシア研究に一つの基礎を与えたといえる。例えばドイツでは、16世紀以

後、ルター派諸侯やプロテスタント諸都市などにより、宗派的大学が続々と設立された。こうした大学では聖書研究に不可欠のものとしてギリシア語が重視され、その教育・研究の一環として、ギリシア古典の研究が行われたからである。だが、かかるギリシア語や古典の教育・研究のあり方は、同時に、それに対し限界をも付与することになった。すなわち藤縄氏によれば、「十六世紀には新しく大学も創設され、ギリシア古典の研究が活発に行われていたが、十七世紀にはキリスト教の立場から反動が起こり、ギリシア古典は軽蔑され、ギリシア語は『新約聖書』を読むためにのみ必要な言語とみなされた。』<sup>62)</sup>のである。宗教改革以後の宗教的対立や宗教戦争の時代には、異教徒の世界である古代ギリシア世界は、無視されたり、さらには軽蔑の対象にすらなっていたのである。とりわけドイツでは三十年戦争がこれに追いつちをかけた。ベングツォンは「十七世紀は古代学にとっては明白な不毛の時代であった。」<sup>63)</sup>と言いつつ、続けて「その原因は、とりわけ三十年戦争とその諸結果に帰せられる。」<sup>63)</sup>と述べている。だがこうした不毛の時代がみられたのはドイツだけだったわけではない。16・17世紀は、ヨーロッパのあらゆる国々を巻き込んで宗教改革や宗教戦争などが行われ、宗教問題を軸としてどの国も大きく揺れ動いていた時代であった。そのなかで、古代ギリシア研究をめぐる環境は、程度の差はあれ、どの国でも同様な状況だったからである。

古代ギリシア研究が、その復活の緒につくのは18世紀に入ってからである。その動きはイギリスから、リチャード・ベントリー(1662~1742)の活動によって始まった。彼は最初オックスフォード大学に職を得たが、1700年にはケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに移って校長となり、終生その職務をつとめた。彼は1794年



にオックスフォードで「ボイル講座」の最初の講師となっているが、そこでは国教会の教義とニュートン物理学との調和に多大な努力を払い、これによってニュートン物理学の普及にも大きな貢献を行っていることでもよく知られている。<sup>64)</sup>だが彼の本分は古典学にあり、ホメロスその他の古典の校訂を行い、原典の出版を推進した。この活動によって彼は古典学の「次代の進歩に寄与した。」<sup>65)</sup>と評価されている。

ベントリーの継承者が現れたのは、オランダであった。ライデン大学で18世紀半ばから後半にかけて活動した、ヘムステルホイス(1685～1766)、ヴァルケネール(1715～85)、ルーンケン(1723～98)の3名の古典学者たちがそれぞれである。彼ら4名の古典学者・文献学者については、共通の特質が認められている。というのは、「注意すべきことは彼ら三名の仕事が目指したものは、ベントリー同様、まずなによりも古文文献学だったということである。」<sup>66)</sup>とされているからである。ここでいわれている「古文文献学(Altphilologie)」と呼ばれているものの内容についてはあとで触れることになるが、ここではとりあえず、オランダの三大学者の最後にあげられているルーンケンは、われわれのガッテラー(1727～1799)とは全くの同時代人だということに注意しておきたい。<sup>67)</sup>

しかし、ガッテラー自身について考える前に、なお18世紀半ばまでにドイツで起こった二つの画期的事件について見ておかなければならない。一つはヴィンケルマン(1717～1768)の出現であり、あとの一つはゲッティンゲン大学創設およびそこにおける文献学研究室の創設である。まずヴィンケルマンの活動についてみることにしたい。彼はガッテラーからみれば10歳年長にあたり、当然ながらハレ大学入学(1738)その他の活動も、それだけ早い。彼がドレスデンでの研究をもとに、古代ギリシア研究に巨大な影響

を与えた著作『ギリシア美術模倣論』(1755)<sup>68)</sup>を発表したとき、28歳のガッテラーはまだニュルンベルクのギムナジウムで教鞭をとっていた。ガッテラーがゲッティンゲン大学に招聘される4年前ということになる。ヴィンケルマンは一度もギリシアには足を運んだことはなかったが、本書ではギリシアの国土が自然の理想的な美を提供していることを述べ、その上で、古代ギリシア人はこの幸運な環境から「精神的自然」＝「美の原像」<sup>69)</sup>を受け取り、表現したと考えた。そして古代ギリシア彫刻の構造の調和、各部分の結合の高雅、充実した豊かな均斉などについて指摘しつつ、「気品ある単純と静穏なる威厳(eine edle Einfalt und eine stille Größe)」<sup>70)</sup>とその特質を表現した。さらに「我々にとって偉大になる、否出来れば他の模倣を許さぬ者となる唯一の道は古代人の模倣にある。」<sup>71)</sup>と主張したのであった。彼は本書を出版したと同じ1755年にローマに移り、やがて本書の立場を敷衍した『古代美術史』(1764)を出版するが、1768年、暴漢に襲われてこの世を去った。彼の立場は今日「新人文主義」と呼ばれるが、その「造形美術には自然に根差す永遠に不変の法則があり、それは古代ギリシアの作品に体现していると信じる」<sup>72)</sup>考え方は、多方面に大きな影響を与えた。そこから、造形美術だけでなく、古代学全体についても「ヴィンケルマンの『古代美術史』がそれ以後のドイツにおける発展に決定的影響を与えたことは、疑う余地のない事実である。」<sup>73)</sup>と評価されているのである。

その一例を挙げよう。それは、実はフリードリヒ・シュレーゲル自身である。ヘルダーはかつてある著書で次のように呼びかけた。「ヴィンケルマンが・・・美術に関してギリシア人の秘密を解き明かしてくれたように、われわれにギリシアの知恵と詩の神殿を開いてくれる一人の

ドイツ人のヴィンケルマンは・・どこに  
あろうか。美術に関するヴィンケルマンはただ  
ローマでのみ開花することが出来た。しかし詩  
人に関するヴィンケルマンはドイツにも出現で  
きる。」<sup>74)</sup>フリードリヒ・シュレーゲルの上の論  
文こそ、まさにこの「詩人に関するヴィンケル  
マン」たらんとして、またそう成り得たとの自  
負のもとに、発表されたものだったのである。

次にゲッティンゲン大学とドイツ文献学の発  
展について見ることにしよう。ムーラックによ  
れば、「古典的文献学」は二つの頂点を持つとい  
う。<sup>75)</sup>一つは「14世紀末から16世紀初頭に至る  
人文主義の時代」、他は「18世紀から19世紀への  
転換期における新人文主義の時代」<sup>76)</sup>である。  
前者においてイニシャティヴを発揮したのは  
イタリアであった。だが後者ではドイツが指  
導的役割を果たした。それというのも、人文主  
義文献学から新人文主義文献学への「古典的文  
献学の転換は18世紀中葉に起こったが、それが  
開始された場所はゲッティンゲン大学であっ  
た。」<sup>77)</sup>からである。

ゲッティンゲン大学が正式に発足したのは  
1737年であるが、実質的には34年から講義が  
開始されていた。この34年に早くも講義を始めた  
例の中にゲスナー(Johann Mathias Gesner,  
1691~1761)がいる。そしてゲッティンゲン大学  
は、37年、ゲスナーの提案を容れて文献学研究  
室をドイツで初めて設立した。18世紀にはいる  
とドイツでも古代への関心が生まれ、例えばレ  
ッシングの師であり、またヴィンケルマンの先  
駆者とも言われるライプチヒ大学のクリスト  
(Johann Friedrich Christ, 1700~1756)の  
ように、古代美術史や古代の考古学に関する広  
い講義を行う学者たちも現れている。またこう  
した先駆者があってはじめて、ヴィンケルマン  
が出現し得たわけでもある。ゲスナーもまたこ  
うした動きを加速した人であった。彼も古代文

学、芸術をはじめ古代の遺物などを広く扱った  
し、さらに、ドイツで最初の文献学の演習を始  
めているからである。<sup>78)</sup>

ゲスナーが死去した後、その後任として白羽  
の矢を立てられたのは、上でも述べたライデン  
大学の「三大学者」の一人ルーンケンであっ  
た。しかしルーンケンはこの招聘を断ってきた。  
だが、彼はその代わりある人物を推薦した。そ  
してこの人物こそ、上でも述べたハイネ  
(Christian Gottlob Heyne, 1729~1812)だ  
ったのである。ハイネはドレスデンでヴィンケ  
ルマンの知遇を得ていたし、またライプチヒ大  
学では上のクリストの指導を受けてもいた。そ  
うした新進の学者として、1763年、彼はゲッティ  
ンゲン大学に乗り込んできたわけである。当時  
ゲッティンゲン大学ではすでに1745年以後ミハ  
エリスが活動していたし、ガッテラーも59年に  
赴任してきていた。ミハエリス46歳、ガッテラ  
ー36歳、ハイネは34歳であった。そしてハイネ  
の赴任とともに、3名の間には直ちに親密な交  
際が始まっている。その後、70年代にはいると  
ミハエリスとハイネの間は次第に疎遠になって  
はいくが、しかしハイネとガッテラーの親密な  
関係は終生続いた。

ハイネの大きな功績は、ドイツ文献学の歴史  
のに大きな画期をもたらしたこと、すなわち、文  
献学を従来の従属的位置から引き上げ、独立し  
た学問へと格上げしたことにあるといわれる。  
その動きは、すでにゲスナーからはじまってい  
た。ハイネはこの「古典的文献学」のなかの  
第2の頂点に向かう動きを継承したばかりでは  
ない。再びムーラックによれば、「当時の古典的  
文献学の転換を特定の学者に関係付けるとすれ  
ば、それは誰よりもまず、ゲスナーの後任ハイ  
ネであった。」<sup>79)</sup>すなわち、旧来の文献学は正確  
なテキストの復元、個々の語句の意味や発音  
等の研究が主たる内容であり、それによって



神学や法学の研究に資することが目的であった。これに対してハイネが目指したことは、旧来の研究内容はもちろん継承しながらも、それを通じて、「古代的なもの」の「正確な歴史的再構成」<sup>80)</sup>を行うことであった。そしてこれとともに、また「文献も目的から手段へと、また歴史的解釈の対象から史料へと転化したのである。」<sup>81)</sup>彼は、ゲッティンゲン大学における講義も、旧来の文献学のそれと内容を大きく変えた。個々の文献に関する詳細な注釈などを行わず、それらの文献から引き出し得た諸事実の叙述を行ったのである。こうして「初めて古典古代の生活の全領域が講義で扱われた。」<sup>82)</sup>。そこでは彼は、基本的な考え方はヴィンケルマンに依りながら、また考古学<sup>83)</sup>をも援用して、古代人の政治、社会、宗教、思想から生活の全領域にわたって、これを再構成しようと努めたのである。そしてこうした努力を通じて、「古典的文献学」における「新人文主義文献学」への転換を遂行したのである。

ハイネとガッテラーの上で述べた親密な関係は、もちろん人間的共感が基礎にあったとしても、それだけであったわけではないであろう。そこには当然学問的共感の存在が推定される。実際、例えばガッテラーは、『普遍史序説』におけるギリシア史叙述で、ハイネを援用しているのである。<sup>84)</sup>しかしなによりもその論拠となるのは、二人の研究内容の共通性である。すなわち第1章で見たように、ガッテラーもまた古代ギリシア人の書き残した諸文献から、あるいはその神話、伝説や歴史書その他の文献から、古代ギリシアの歴史を「再構成」しようと努めていたからである。先にガッテラーとミハエリスの関係については後者の前者への影響について述べた。<sup>85)</sup>しかしガッテラーとハイネとの関係は、両者が同年代ということもあり、またハイネと出会う以前の1761年に、すでにガッテラ

ーが『普遍史教科書』でそうした努力を開始していたこともあり、一方的な影響関係ではなかったと考えられる。それはむしろ相互に共感しあい、また相互に刺激しあった関係だったと考えられる。先に、前期の『普遍史序説』において伝統的普遍史の枠内でギリシア史叙述を行っていたガッテラーが、後期の『世界史試論』では古代ギリシアに関する百科事典的叙述を与えるようになったことを示した。すなわちガッテラー自身の新たな研究方向は、ハイネによって形成されつつあった新人文主義文献学の目指す方向と、軌を一にするものだったのである。

ただし、ハイネが古代学者あるいは文献学者としてとどまったのに対し、ガッテラーはあくまで歴史学者であり、時代に対応した世界史を記述することを目指していた。そしてこの点から、そしてそのかぎりでは、両者の歩む道は別れる。<sup>86)</sup>すなわちガッテラーは『世界史試論』において、世界史の構成原理として啓蒙主義的進歩史観を採用している。ハイネの場合は、それに対しヴィンケルマンの考え方に忠実であった。さらにハイネは、「彼の最大の業績は彼の弟子たちであった。」<sup>87)</sup>と評されているほどに優れた教育者でもあった。その弟子の一人であるフリードリヒ・シュレーゲルが行ったことは、師の新人文主義的ギリシア観をより徹底し、深化させることだったのである。

#### 四. 小 括

シャウムケルはドイツにおける文化史記述の発展を概観した著書で、ガッテラーの4編の世界史記述のなかで『世界史』(1785)に注目してその特質を次のように指摘している。「ガッテラーの本書は、全体として、道徳的・文化的進歩という指導的概念のもとで叙述されている。」<sup>88)</sup>さらに「彼にとって人類全体は同質的一

種族に他ならず、いかなる個性的諸民族へと細分されるものでもなかった。文化的発展のなかで中心の位置を占めていたのは、知性の増大ということであった。<sup>89)</sup> シャウムケルもまた、筆者が本稿で度々指摘してきたと同じように、ガッターの後期の世界史記述が啓蒙主義的文化史に属するものであると判断していることになる。ただし、彼はガッターのこの立場を肯定しているわけではない。「ガッターが文化史として提供したのは古い事物の寄せ集めと、素材の古臭い処理の仕方以外のものではなかった。古代の考え方や見解に対する独特な理解もないし、また諸民族のうちに生きている諸力の独自な理解もない。なるほど彼はギリシア人の世界観に沈潜はした。しかしそれはただ、個々の思想家の哲学的思索の内容を叙述するというやり方で行っただけであった。・・・またギリシア精神の特性や、東洋と西洋との中間にある、その偉大な世界史的地位を際立たせることもおこなわなかった。」<sup>90)</sup> この厳しい批判は、20世紀初頭、すなわちガッター後19世紀の1世紀間を越えた時点で行われているものである。そしてシャウムケルのこの批判の根底にあるのは、その19世紀において展開したドイツ歴史学への信頼と、その成果に対する自信であった。こうした状況のなかでは、ギリシア研究の歴史の中で、ガッターに対し与えるべき地位は存在しないことになる。事実彼は19世紀を通じて「殆ど完全に忘却の彼方の人」<sup>91)</sup> であった。

だが、もう一度フリードリヒ・シュレーゲルに戻ってみよう。上で紹介した論文で、彼は「ギリシア研究一般と、特にギリシア文学研究においては、われわれの時代は偉大な一段階の入口にたっている。」<sup>92)</sup> とし、ギリシア研究の歴史を次の三段階に分けている。「長い間ギリシア研究はローマという仲立ちを通じてしか知られておらず、その研究は孤立し、哲学的原理も完全に

欠けたものであった(第1期)。次いでその相変わらず孤立した研究が、恣意的仮定によって、または一面的原理と個人的視点によって秩序づけられ、方向づけられた(第2期)。・・・最後の、そして最大の歩みが、いまだ成し遂げられずに残っている。すなわち全体を客観的原理に従って秩序づけることがそれである(第3期)。」<sup>92)</sup> ここで第1期と呼ばれている段階は17世紀まで、第2期と呼ばれているのは、18世紀におけるギリシア史研究を念頭において設定されたと考えられる。そしてもちろん、その第3期の「入口」のドアを開いたのは自分自身であると、彼は自負していた。またそう自負できるほどの内容を有していることも、先に示しておいた。

だが、フリードリヒ・シュレーゲルに始まるこの「第3期」は、それ自体、彼も認めているように上の「第2期」を前提として初めて開始できたのである。しかもこの「第2期」の成果は、観点や用語の大きな変化を経た上ではあるが、今日にもつながっている。例えば、あらためて『世界史試論』におけるギリシア史の構成を振り返ってみよう。そこではまず「アッシリア期」において、古代ギリシア史は「伝説の時代」と「歴史時代」に区分され、さらにこの「伝説の時代」は「ペラスゴイ時代」(1857～1558BC.)と「ペラスゴイ・ヘレネス共存の時代」(1558～1184BC.)に下位区分されていた。この区分は、用語は今日とは大きく異なっている。だが内容上は、この「ペラスゴイ時代」はアカイア人、イオニア人などが先住民のいたギリシアに南下した時代、そして「ペラスゴイ・ヘレネス共存の時代」は今日の「ミューケーネ文明」の時代に対応している。内容だけではない。年代もほぼ正確である。また「歴史時代」は「ヘーラクレイダイの時代」(1185～984BC.)と「共和政と民族的統一性形成の時代」(984-553BC.)とに



区分されていた。前者は今日の「暗黒時代」、あるいはホメロスによって描かれた「英雄時代」に相当する。そして後者は身分闘争期ポリス、あるいは貴族政期ポリスに相当している。最後に、「ペルシア期」(553～384BC.)のギリシアは、まさに今日の「古典期ポリス」または「古代民主政期ポリス」に相当しているのである。すなわちここには、見方を代えれば、今日通説となっている古代ギリシア史の時代区分が、ほぼ年代的にも正しい形で提出されている。<sup>93)</sup> ガッターラーの時代区分はそれだけの新しい実質も備えていたのである。

ガッターラーが、このように見方によっては今日のそれに相当する時代区分を提出していたことは、それなりに大きな意味を持つと筆者は考える。すなわちここで彼が提出した古代ギリシア史像は、伝統的な「普遍史」におけるそれを乗り越えたものとなっており、同時に結果として、近代のそれを準備したものと考えられるのである。

先にも見たように、ガッターラーはまだ伝説の多くを歴史的事実と考えていたし、また彼にはギリシア世界を「ポリス世界」としてとらえる考え方はなかった。また彼は、フリードリヒ・シュレーゲルが言うように、「全体を客観的原理に従って秩序づける」には至っていないかもしれない。なお「一面的な原理」に基づいていた

に留まっていたかもしれない、すなわち啓蒙主義的原理に固執し、そこからついに踏み出すことができなかったかもしれない。しかし他方、彼は伝統的普遍史には見られなかった古代ギリシア「文化」の詳細な記述を行った。そしてその歴史的発展の諸段階について、「読み替え」を通じてであれ、今日からみても評価できる見取り図を与えた。これに対しフリードリヒ・シュレーゲルが行ったことは、これらを前提としながら、しかしガッターラーのこの啓蒙主義的観点を批判しつつ、「歴史主義」的観点から新たなギリシア像を構築することであった。このように考えるなら、ガッターラーは啓蒙主義的原理にとどまったが、かえってそのことにより、伝統的な「普遍史」のそれとも、また19世紀の歴史学が提出したものとも異なる、独自の古代ギリシア史像を提出したといえる。彼は18世紀という時代のヨーロッパ人の関心のあり方に応じて、世界市民文化の一発展段階である古代において、それを構成した一要素として古代ギリシア世界をとらえた。そしてかかる観点から、その詳細な記述を行ったのである。こうした意味で、ガッターラーのギリシア研究はドイツにおけるギリシア研究の一つの時代を形成したと筆者は考えるのである。そしてそのことにより、次の時代を準備する内容も獲得したと考えるのである。

#### 〔註〕

1) 例えば、中村 哲『歴史はどう教えられているか』NHKブックス731、1995年では、「西ヨーロッパ型」として一括されている西欧諸国の教科書の共通の特徴として、「古代についてはオリエンタリズムから始まり、ギリシア、ローマが中心である。」「西ヨーロッパは古代ギリシア・ローマを古典古代と言っている。」(18頁)とされている。そこでは今日なお、「古代」は自国史における古代ではなく、古代ギリシア・ローマなのである。

2) 1. 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究(I-1) - Johann Christoph Gattererと世界史 -」『埼玉大学紀要 教養学部 第26巻 1990』(1991年3月、以下、拙稿(1))。  
2. 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究(I-2) - 「年代学論争」とJohann Christoph Gatterer -」『埼玉大学紀要教養学部 第27巻 1991』(1992年3月、以下、拙稿(2))。  
3. 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究(I-3) - Johann Christoph Gattererの世界史叙述に

おける聖書の位置—」『埼玉大学紀要 教養学部 第29巻 1993』(1994年3月, 以下, 拙稿(3))。

4. 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究(I-4) — Johann Christoph Gattererとエジプト史の問題 —」『埼玉大学紀要 教養学部 第29巻 1994』(1995年3月, 以下, 拙稿(4))。

- 3) 特に拙稿(1)を参照されたい。
- 4) 聖書とガッターの関係については拙稿(3)を参照されたい。
- 5) Gatterer, J.C., *Einleitung in die synchronistische Universalhistorie zur Erläuterung seiner synchronistischen Tabellen*, 2 Bde. Göttingen 1771. (以下では *Einleitung* と記す) なお, ギリシア史が叙述されているのは第2巻の314頁から474頁までであり, そこからの引用は本文中に頁数を記入する。
- 6) 以下ドダニムまでの記述は *Einleitung*, 1. Bd. S. 76ff. でも検討されている。
- 7) 太田秀通『テーセウス伝説の謎』岩波書店 1982年, 117頁以下参照。
- 8) ペラスゴイ問題には今日なお未解決の問題である。それについて, 「ギリシア史で普通に民族問題とよばれるものは, アカイア人をめぐる問題や, Pelasgoi問題などであるが, これは極めて複雑な問題で, 実に多くの仮説が立てられている。」と言われているからである。その原因については, 「伝承が古いとか少ないとかいうためでなく, 伝承の糸が絶望的な状態にからみついているためである。」と説明されている(太田秀通『ミケーネ社会崩壊期の研究』岩波書店 昭和43年, 363頁)。ガッターの場合, 後にも触れるように, この複雑に絡みあった伝承を全て歴史的事実として承認したうえで, 以下のようにそれを整理したと言える。
- 9) 本書の最後に掲載している「共時的年表」のなかでは創世紀元1800年代の欄に, アイギアレウスをアッシリアのニヌス, 中国の堯, エジプトのメネスと同時代人として記載している。堯とメネスは別として, ニヌスとアイギアレウスの同時代人とするのは, 後でも見るように, エウセビオス以来の伝統的見解である。
- 10) *Einleitung*, 1. Bd. S. 46.
- 11) Ebenda, S. 51.
- 12) ギリシア人の伝承ではクストスの息子アカイオスとイオーンが, それぞれアカイア人, イオニア人の祖となったとあり, それに従っているの

である。

- 13) 繁雑をさけるために諸王国の王位を篡奪したヘーラクレースの子孫たちの名称を省いたが, ヘーラクレイダイの帰還の伝承が細部に至るまで歴史的事実として叙述されている。例えばヘーラクレースの子孫の一人テーメノスは, かねて「案内者に三つ目の男を使うべし。」とのデルフォイの神託を得ていたが, 片目の馬に乗っている男オクシュロスに出会い, これこそ神託の示した男であるとして案内人に雇い, 他のヘーラクレイダイとともにペロポネソス侵入に成功したのであった。そしてその時の約束で, オクシュロスはエリスの王位を獲得したし, テーメノスはアルゴスを獲得したのであった。
- 14) 網羅的ということについては, 個々の国について1~2頁程度をあてながら, 全体で133頁となっていることでも推定できるであろう。ただしこのうちテッサリア地方は全体で69頁を占めている。これはテッサリア地方について従来の研究では不十分な分析しか行われてこなかったとして, ガッターが意識的に詳細な叙述を与えようとしたことに起因している。
- 15) ヘーラクレイダイはペロポネソスを征服した後, アッティカを攻撃したが, この時デルポイの神託でアッティカの王を殺さなければ征服できるだろうとの予言を得ていた。これを知ったコドロスは, アテネを包囲しているペロポネソス軍に貧しい身なりをして近付き, 兵と喧嘩してわざと殺されたのである。その後アッティカの王を殺したことを知ったペロポネソス軍は征服を諦めて退却し, こうしてアテネは危機を免れたという。
- 16) 上でも述べたが, 別の場所では10年任期アルコン政の成立をもって民主主義の成立ともしており(S. 341), 記述に一貫していないところがある。
- 17) プルタルコス, 「テーセウス伝」。なお, テーセウスを民主主義者としてとらえることはクレイステネス以後のアテネで行われたものらしいこと, また彼を民主主義者としてとらえることで生ずる矛盾などについては太田秀通, 上掲書本論第1章などを参照。
- 18) アリストテレス『アテナイ人の国制』のパピルス文書がエジプトで発見され, 大英博物館が入手・発表したのが1891年だったことも, ここで想起しておくべきことかもしれない。
- 19) Gatterer, J.C., *Versuch einer allgemeinen*



Weltgeschichte, Göttingen 1792. 以下では頁数は本文に。

- 20) 後期の二著作の間にも、もちろん性格の相違がみられる。『世界史』は普遍史の枠内での啓蒙主義的世界史であるのに対し、『世界史試論』は、啓蒙主義的世界史であると同時に、そこからさらに19世紀的・近代的世界史への移行を試みた世界史叙述だったと言える。この点について、詳しくは拙稿(1)を参照されたい。
- 21) ガッテラーの態度変更の原因は、アストリクや新教義派、とりわけゲッティンゲン大学の同僚ミハエリスの影響、またビュッフォンの博物学の影響が考えられる。詳しくは、拙稿(3)でこれに関する説明を試みたので、参照されたい。
- 22) 『世界史試論』(1792)の構成
- 第1期1800年間；アダム＝ノア期(1～1809)。
- 第2期1800年間；アッシリア＝ペルシア期(1809～3600)
1. アッシリア期(1809～3431)。
2. ペルシア期(3431～3600)。
- 第3期1800年間；マケドニア＝ローマ期(3600～JC. 1453)
1. マケドニア期(3600～3838)。
2. ローマ期(3838～JC. 622)。
3. ローマ＝スラヴ＝アラブ期(622～1037)。
4. ローマ＝トルコ＝モンゴル期(1037～1453)。
- 第4期300年間(～現在まで)。

#### 〈各章の内容〉 I. 諸民族の歴史

##### II. 人類の歴史

1. 産業と分業 2. 芸芸  
3. 科学 4. 商業と海運  
5. 家族制度 6. 社会制度  
7. 宗教

- 23) 彼が文化史的視点から時代区分を行うようになったのは、『世界史』(1785)以後である。文化史叙述を歴史の中心に据えたのは、ヴォルテールなど啓蒙主義者たちであった。筆者がガッテラーをドイツ啓蒙主義歴史学の代表者とするのも、彼が後期の著作で文化的発展を基軸として世界史を記述しているからである。
- 24) 『普遍史序説』では初代の王をイーナコスとされていたが本書では、イーナコスはアルゴスを流れる川の名称であることを理由に、その息子とされるポーネウスが即位したとされる2118(1866BC.)年が、真の出発点かもしれないとも

言っている(S. 22)。

- 25) 最後の項目である「聖なる競技による民族的統一の形成」では、オリンピア祭、ピュティア祭、イスティミア祭、ネメア祭の四大祭について述べている。
- 26) 「アッシリア期」では「諸民族の歴史」の44頁に対して文化史を記述する「人類の歴史」に68頁、「ペルシア期」では「諸民族の歴史」の24頁に対し「人類の歴史」の62頁というふうに、文化史記述に遥かに多い頁数をさいている。
- 27) 政治史的叙述としてはペルシア戦争、ペロポネソス戦争、テーベとスパルタの覇権争いと、最後にマケドニアの覇権確立について述べており、この面では前期の記述をそのまま踏襲している。
- 28) Versuch, S. 140.
- 29) 特に拙稿(2)を参照されたい。またエウセビオスについてはその「年表」の要約を拙稿(4)に採録しておいた。
- 30) Augustinus, De civitate Dei 413～426. 服部英次郎、藤本雄三訳、『神の国』岩波文庫。以下ではその巻数と章を示していくことにする。
- 31) 『神の国』第22巻第30章、本書の最終部分で、神の国 実現までの歴史を次のように時代区分している。
- 第1期；アダム～ノアの大洪水  
第2期；ノアの大洪水～アブラハム  
第3期；アブラハム～ダビデ  
第4期；ダビデ～バビロン捕囚  
第5期；バビロン捕囚～キリスト生誕  
第6期；キリスト生誕～最後の審判  
第7期；安息日  
第8期；永遠なる第8日；神の国の実現
- 32) アウグスティヌスは、11巻から「二つの国」の歴史を叙述するが、そのうちアッシリアからローマまでの「地上の国」の歴史が記されているのが第18巻である。表はその18巻を中心に作成した。年号に関しては、ローマ建国の創世紀元4958年までは彼の記述にしたがって計算した。だがこれを前753年と等値したのは、彼自身がギリシアとローマの歴史をウォルロに依って記述したことを述べているし(18-2)、当然そこでは前753年をローマ建国の年とする「ウォルロ紀元」が承認されていると考えられるからである。さらに、イエス生誕年については彼は明言していないが、これを3549年としたのは、アレクサ

- ンドリアのクレメンヌスやテルトゥリアヌス、オリゲネス、アフリカヌス、ローマのヒュッポリトスらのローマ時代の主要な教父たちが、それをローマ紀元751年においているからである。そして何よりも、本書の記述が最も多くを負っているエウセビオスも、イエス生誕をこの年としているからである。なおこのことからわかるように、アウグスティヌスだけでなくローマ時代には「イエス紀元」という考え方はなかった。表にある「イエス前」の数値は、便宜のため筆者が入れたものである。
- 33) エウセビオスの「普遍史」の概略は拙稿(4)で示しておいたから、参照されたい。両者が構造においても内容においてもほとんど同一であることは一見して明らかであろう。
- 34) 「ノアの大洪水からアブラハムまでの年数」として「千七十二年」という数値が述べられており、アブラハムの誕生の年は2262に1072を加えた数になる(16-10)。ただしここで言う「前2017年」は、注29で述べた仮定が正しいとしてのことではある。
- 35) 例えば、アブラハムの召命から出エジプトまでを430年間とし(16-24)、また「ローマが建設されたときには、イスラエルの民は約束の地に七百十八年をすごしたのであった。」(18-22)とする数値もエウセビオスによっている。両者の間の創世紀元による年号の相違は、結局アブラハムの誕生までの年数の相違によることになる。
- 36) 「世俗の文芸がもっともはなばなしく開花したのはギリシアの言語においてであったけれども、かれらが自分たちの知恵をわたしたちの宗教—そこには真の知恵が見出されるのである—より古いと見られるということで喧伝する何の理由ももっていないのである(18-37「預言者は異教の哲学者たちに先行したことについて」)。
- 37) 「ことばはその文字と相即して父祖たちのあの継承によって守られてきたと信じるべきである。……それゆえ、いかなる種族といえども、神の知恵がそこに内在するところのわたしたちの族長や預言者たちにまさってその知恵の古さを虚しくいいふらすべきではない。その学問の古さによって偽って虚しく誇るのをつねとしているエジプト人でさえ、かれら自身のどのような知恵をもってしても、わたしたちの族長の知恵よりも時代的に先行してはいなかったことが知られているのである。」(18-39、「ヘブライ語には当初から固有の文字があったことにつて」)
- 38) 詳しくは拙稿(2)を参照されたい。
- 39) 本稿では議論しないが、アウグスティヌス、エウセビオスがローマ建国の頃に滅ぶとしている「アッシリア」は、古代ギリシア人などによって伝えられた、ペルスからサルダナパルスに至る「アッシリア」である。そしてそれは、今日われわれに親しい古代世界帝国アッシリアとは違うことを指摘しておきたい。今日のアッシリアはむしろアウグスティヌスの「アッシリア」が滅んだ後オリエントを統一した。だがこのアッシリアは、アウグスティヌスでは「カルデア人」と表現されている(17-23, 18-24)。
- 40) 兼岩正夫、『西洋中世の歴史家』東海大学出版会, 1968年, 134頁。
- 41) Otto von Freising, *Chronicon sive historia duabus*, 1146. Otto Bishop of Freising, *The Two Cities*. Translated by Mirow C.C., Octagon Books. INC. New York, 1966. 以下、本書からの引用は、巻一節の数で示す。
- 42) 彼はまたオリンピアド紀元も併記しているが、表-2では、ローマ以後について紙面の都合上、ローマ建国紀元の年号のみを記入した。また、エウセビオスのようにアブラハムではなくニヌスが選ばれたのは、彼が人類始まって以来最初の征服戦争を遂行し全アジアを支配下に置き、かくして最初の地上の国であり、かつ最初の世界帝国を建設したからである(I-6)。
- 43) ローマの建国について、オットーは「ニヌスの統治から1300年後、トロイ陥落から414年、第6オリンピアドの年、アダムから4484年後」(II-3)と述べ、イエス生誕年については、「アウグストゥス帝第42年、ローマ建国紀元752年、オリンピアド紀元第193年、アダムより5500年」(III-6)としている。
- キリスト紀元1年=5501年=ローマ建国紀元753年としてローマ建国の年をBCに換算すると、4484年=1017BCという数字が出てくる。他方、表にあるようにアブラハム誕生をニヌス第42年(=3334年)とし(I-4)、その1300年後だから、ここからは4596年=909BCという数値が出てくる。もちろんローマ建国紀元のほうからは、それは753BCとなる。つまり、ローマ建国を「キリスト前」で統一すると1017, 909, 753年という、3種類の年号が記されていることになる。この原因は、アブラハム誕生年はアウグスティヌスによりながら、ローマ建国の創世紀元



- による年号はエウセビオスの4448年に近い数値を採用し、しかもイエス生誕年はアフリカヌスの数値を採用するという、首尾一貫性のなさによると考える。その原因は不明だが、オットーも年号については悩んでいたと見える。ある皇帝の統治年数をめぐる対立に関する言葉ではあるが、「この対立については歴史家に解決してもらうことにしよう。」(V-16)と述べたりしているからである。
- 44) ヒューブナーと彼の『政治史問答』については拙稿(2)で取りあげたし、またそこには彼自身による要約も、資料として紹介しておいた。
- 45) Gatterer, J.C., *Weltgeschichte in ihrem ganzen Umfange*. Göttingen 1785. : 『世界史』, 序文。
- 46) もう一人のケラリウスは、今日、歴史叙述に古代、中世、近代という時代区分を最初に取り入れた歴史学者として知られるが、彼との関係については別に論じたい。
- 47) 『普遍史序説』では中国史の叙述は、人類史の第3期「中世」のなかの「民族移動」のなかで行われる。この時期に初めて世界史に登場してきたからというのである(拙稿(1)を参照されたい)。
- 48) Schlegel, Fr., *Über das Studium der Griechischen Poesie*, 1797. in, Jakob Minor (Hrsg.), *Friedrich Schlegel 1794-1802*, 1882, 1.Bd. 以下、本書からの引用は本文中に頁数を示す。なお、筆者はかつてフリードリヒ・シュレーゲルの本論文に関する論考を発表したことがある。詳しくは以下の拙稿を参照されたい。  
「『初期』フリードリヒ・シュレーゲルの歴史意識—近代文学と古代文学—」『埼玉大学紀要 教養学部 第13巻 1977』(1998年3月)
- 49) Schlegel Fr., *Von den Schulen der griechischen Poesie* 1794. (上記ミーノール版初作品集所収)
- 50) 引用は全て上掲書8~10頁から。
- 51) Schlegel, Fr., *Versuch über Begriff des Republikanismus*, 1796. in; *Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe*, hrsg. von Ernst Behler, 7.Bd. 1966.  
本論文についても筆者はかつて触れたことがある(拙稿「『初期ロマン主義』の成立とフランス革命」, 『埼玉大学紀要 教養学部 第19巻 1983』(1984年) 参照)。
- 52) Ebenda, S.17.
- 53) Ebenda, S.18.
- 54) 例えばロマン主義の段階で記された、次の「断片」を参照されたい。ここでもなおそれは「古典」とされている。: 「古代人の古典的な詩作品はすべて関連しあっていて不可分であり、有機的全体を形成している。正確に見るならばただ一篇の詩であり、そこにおいて文学そのものが完璧に現象しているのである。」(『イデーエン断片』(1800), No. 95)
- 55) 太田秀通『スパルタとアテネ』岩波新書, 169頁。
- 56) 以下の概観では下記の諸文献を参照した。  
藤縄謙三, 『ギリシア文化の遺産』南窓社, 1993。  
樺山紘一, 『異境の発見』東大出版会, 1995。  
Gooch, G.P., *History and Historians in 19th Century*. 林健太郎訳『十九世紀の歴史と歴史家たち』築摩叢書  
Ingomar Weiler, *Griechische Geschichte* 1976:  
in, "Die Altertumswissenschaft" Darmstadt 1976.  
Bengtson H., *Grundriss der Römischen Geschichte* 1967.  
Woodward, A.M., *Greek History at the Renaissance* in, JHS 63 (1943).
- 57) 藤縄謙三, 上掲書, 221頁。
- 58) ヘロドトスは、1474年にロレンツォ・ヴァラのラテン語訳が出た後、1502年にギリシア語原典が、ついで1533年イタリア語、1535年ドイツ語、1556年フランス語、1584年に英語に翻訳されている。ツキュディデスの場合もロレンツォ・ヴァラのラテン語訳が最初で1483年、次いでギリシア語原典が1502年、1527年フランス語、1533年ドイツ語、1545年イタリア語、1550年英語に翻訳されている(Woodward, op.cit.p.13f.)
- 59) 樺山紘一, 上掲書, 228頁。
- 60) Woodward, op.cit.p.10
- 61) ibid.pp.11-12.
- 62) 藤縄謙三, 上掲書, 222頁。
- 63) Bengtson, a a O.S.2.
- 64) M. ジェイコブ, 中島秀人訳, 『ニュートン主義とイギリス革命』星雲社 1990年, 特に第4章, 第5章を参照。
- 65) 岩波『西洋人名辞典』
- 66) Weiler, a a O.S.2. この点についてはグーチも全く同じ評価を下している。ギリシア研究の18世紀における復活について述べている場所で、

- 「その復活はベントリーによって開始され、ライデン大学の三大学者、ヘムステルホイス、ヴァルケネール、ルーンケンによって継承された。しかしながらオランダの学者たちは文献学だけしか行わなかった。」(上掲書, 上, 27頁)としているからである。
- 67) 古代学の覚醒を促したものとして、1748年に開始されて大きな話題となったボンペイやヘルクラネウムの発掘もあげられるが、この1748年という年代は、ガッターの大学生時代(1747～1751)にあたっている。
- 68) Winckelmann, J.J., Gedanken über die Nachahmung der griechischen Werke, Dresden 1755. 沢柳大五郎訳『ギリシア美術模倣論』座右宝刊行会, 昭和51年。
- 69) 「この美の原像はただ脳裏に描かれた精神的自然であった。」(上掲書, 23頁)
- 70) 同, 36頁。
- 71) 同, 16頁。
- 72) 藤縄謙三, 上掲書224頁。
- 73) Weiler, a a O.S.2.
- 74) Herder, J.G., Über die neuere deutsche Literaturgeschichte, 1767. in: Herders Werke, hrsg. von Hans Lambel, 3-1, S.152f.
- 75) Muhlack, U., Klassische Philologie zwischen Humanismus und Neuhumanismus. in, "Wissenschaften im Zeitalter der Aufklärung" (1985).
- 76) Ebenda, S.92.
- 77) Ebenda, S.106.
- 78) グーチ, 上掲書, 27頁。
- 79) Muhlack, a a O.S.109.
- 80) Ebenda, S.111. なお, グーチの次の評価も参照: ハイネは「古事物や制度, 神話や宗教の歴史的な理解を創始した。」(グーチ, 上掲書, 28頁)
- 81) Ebenda, S.112.
- 82) グーチ, 上掲書, 28頁。
- 83) 「考古学を遺物および遺跡に即した学問とする見解は彼に始まる。」(岩波『西洋人名辞典』)
- 84) Einleitung, S.314.
- 85) 拙稿(3)を参照されたい。
- 86) ガッターと「新人文主義」, 「歴史主義」との関係については慎重な検討が必要であり, それは別稿に譲りたい。
- 87) グーチ, 上掲書, 28頁。  
弟子たちのうち300名以上が教師となったと言われ, そのなかにはヘーレン, ヴォルフ, シュレーゲル兄弟, フンボルト兄弟なども数えられる。ハイネは, これらの弟子たちの活動を通じて, ドイツにおけ古代ギリシアに対する関心の拡大や研究の深化に大きな貢献を行った。
- 88) Schaumukell, E., Geschichte der deutschen Kulturgeschichtschreibung, 1905. S.60
- 89) Ebenda, S.61.
- 90) Ebenda.
- 91) Wesendonck, H., Die Gründung der neueren deutschen Geschichtsschreibung durch Gatterer und Schläzer, Leipzig 1876, S.v.
- 92) Schlegel, Fr., a a O.S.173.
- 93) 伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』東大出版会, 1982年。ここで示されている, 古典期までの今日の通説的古代ギリシア史の時代区分と, ガッターのそれとを対比すると, 以下のようになる。
- (今日の時代区分) (『世界史試論』の時代区分)
- (1)伝説の時代
- 前史 (2000～16C. BC.) ⇔ 1. ペラスゴイ時代
- (1)ミケーネ時代(16～12C)⇔ 2. ペラスゴイ・ヘレネス共存時代
- (2)歴史時代
- (2)暗黒時代(11～9C) ⇔ 1. ヘーラクレイダイ侵入時代
- (3)前古典期(5～4C) ⇔ 2. 共和政と民族的統一形成の時代
- (4)古典期(5-4C. BC.) ⇔ (3)ペルシア期



表一：アウグスティヌスと「普遍史」（『神の国』第18巻を中心に）

[illegible]

※イエス生誕年については明言していないため、以下の二つの仮定のもとに計算した：アウグスティヌスが、ローマ建国の都市をウォルロに従って755BCに置き、エウセビオス等に従ってイエス生誕年をローマ紀元751年としていること。

表-2 : オットー・フォン・フライジング、『年代記』 (1146)

西暦	紀元	BC	イエルサレム		バビロン			
0	(1)	5500	アダム					
2262	(2)	3238	ノアの洪水					
3334	(3) ニメス 元：42	2166	アブラハム誕生	①《アッシリア》 ヘルス ニス <sup>1</sup> :ネリ建設 全アジヤを支配 セミツリス:エチピア、インド侵入 パピロンの建設 ニス(ニメス) <sup>4</sup> ケセルセス(バルウス) <sup>7</sup> アルマヒレス <sup>8</sup>	《シキウオン》 アイギアレウス1 エクロプス2	《アルゴス》  イナコス <sup>1</sup> 船のイオ、エジプトに渡り、イスに。 フィロキウス <sup>2</sup> メザブス9	《アテネ》  アテナー アビス <sup>1</sup> :エジプトに渡り、冥途セラピスに。	《ローマ》  
	113	2095	アブラハム(75歳) アブラハム(175歳) イサクとの契約		テレクシオン トクリス(トクリマス) <sup>1</sup> レウキボス <sup>4</sup>			
	260	1948	ヤコブとの契約	ペロクス <sup>3</sup>				
	292	1916	イサク死 ヨセフ、エジプト宰相 ：フィロキウス、アモスの時 モーゼ誕生	バルウス <sup>10</sup>	一オーギュボスの洪水、アテナー			
	490	1718	出エジプト	サフルス <sup>14</sup>	オルトリス 一デウカリオンの洪水一	トロホス ケクロプス(アソフィトリオン) <sup>1</sup>		
	495	1713		アスカティダス	マタッス 一タナオスのアルゴス船、タンタルス、ペロプス、ガニメデー、オイディプス、メディア一 一クレタ人がアテネを破る。シタウロス、タイグロス一 一ヴェンレス(セノストリス)のスキューティア人、アマノス艦形成一 コラクス <sup>18</sup> タナウリ <sup>10</sup>			
	535	1673			アミュクタス <sup>18</sup>	エリクトニオス <sup>1</sup>		
	640	1568	ヨシュア死 士師の時代	ランバズ2 <sup>23</sup>	一オルフェウス、ムーセウス、リヌス、「慈悲な神々について語った宗教指導者」一			(ラレントット王國) ピラス (ラティウム王國) ラティヌス アエニアス アエニウス・シルウィウス ロムルウス第10名
	820	1388			タクテニス ティモクス(オキウス) <sup>24</sup>	メサントス		
4484	(4)	908= 753? ローマ建 国 紀元	王国時代 ダビデ、イエルサレム建設 ソロモン、神殿建設 (ユダ)分派 (イスラエル) ウザヤ シャラム、又はメナヘム アハズ ベカ *、又はベキア セア、又はベカ 預言者セア、イザヤ (或は カルデア人) マナセ 預言者イザヤ ヒゼキヤ (或は カルデア人)	エウハレス ピリキアデス サルダナパルス3 <sup>28</sup> (或は、1305年間)	《メディア》 アルバウス <sup>1</sup> ソサルムス <sup>2</sup> マディウス <sup>3</sup> カルディアス <sup>4</sup> ディオクルス <sup>5</sup> アスチュアガス <sup>6</sup> (或は、258年間)	コドロス 王政廃止	アルバの建設 プロカス アムリウス 《ローマ建国》 ロムルス <sup>1</sup> ヌマ <sup>2</sup> タルキニウス・プリスクス <sup>3</sup>	
	(5)	244 335 426 483	バビロン捕囚 預言者エゼキヤ、ダニエル 一部聖書 最後の預言者ハガイ、ゼカリヤ、マラキ 解救、神殿再建  マカベヤ朝 ヘロデの王朝	②《ペルシア》 キュロス <sup>1</sup> カンビュセス <sup>2</sup> ダリウス クセルクセス  アルタクセルクセス  ダリウス・ノトス <sup>14</sup> (或は)	ビクタス、ソロ、キロ、ペリアンドロス、クレオプロス、ビアス 哲学者たち；ビクタゴラス、ゾクラテス、プラトン、アリストテレス  マルソンの戦い テルモピレーの戦い。ギリシア、海戦とポリステアでの戦いに勝利。 シリリアとシリシアで大きな戦いが行われアテネは没落。 スルバクとテーラの戦争。大王の平和。 ③《マケドニア》 フィリップ；ギリシア征服 アレクサンドロス；全オリエントを支配 帝国分裂	タルキニウス・スベルルス <sup>1</sup> コンスル、プルートル <sup>1</sup> フランスのローマ崩壊 カルタゴとの最終結核  ネエ戦争(以後、計3回)  カエサル オクタヴィアヌス		
5500	(6)	752	【キリスト教】 イエス生誕 イエス架刑 パウロ、ペテロ死 教会と国家の対立・抗争→迫害、殉教の時代  最後の大迫害  キリスト教公認 ニケーア宗教会議 ⇒異端の発生  エフェソス宗教会議	《ラテン》 アウグストゥス <sup>1</sup> 皇帝第42年(オリエント紀元193年) ティベリウス <sup>2</sup> 第34年 ネロ <sup>3</sup>  ディオクレティアヌス コンスタンティヌス <sup>1</sup> 即位  ：ローマ帝国＝混合状態の教会 テオドシウス <sup>11</sup> 即位 アルカディウス <sup>13</sup>  アウグスツルス王国放棄	《ローマ帝国》   《ギリシア人》 (東帝国) ホノリウス <sup>12</sup> テオドシウス 2世 <sup>14</sup> ゼノン <sup>16</sup> 即位	《フランク人》   ユスティニアヌス <sup>5</sup> 即位 コンスタンティヌス <sup>67</sup> 女帝イレヌス <sup>68</sup>		
		481 527 754 801 964				クロヴィス洗礼 (メロヴィング朝) ピピン (カロリング朝) カール <sup>69</sup> ルイ <sup>75</sup> オットー <sup>84</sup> ハインリヒ 3世 <sup>88</sup>		
		1047 1146	教皇グレゴリウス 7 世 教皇エウゲニウス 3 世第 2 年			ハインリヒ 4 世 <sup>91</sup> コンラート <sup>93</sup> 第 9 年		